大阪府埋蔵文化財調査報告2005—2

福井遺跡 Ⅱ

２００６年３月

大阪府教育委員会

福井遺跡 II

２００６年３月

大阪府教育委員会

はじめに

福井遺跡は、茨木市豊原町、西福井に所在する弥生時代から中世にいたる遺跡です。平成12年の試掘調査で発見され、平成13年に１次調査が行われました。弥生時代後期に属する溝、土坑、古墳時代の掘立柱建物跡、竪穴住居などが発見されています。調査地周辺には紫金山古墳、海北塚古墳、青松塚古墳、南塚古墳など考古学史上、著名な古墳が散在しています。今回の調査地は一次調査地点の東側にあたり、これらに関連する遺構・遺物が存在することが考えられていました。

今回の調査では古墳時代関連のものは希薄でしたが、弥生時代後期を中心に、溝や土坑、竪穴住居跡など、当時の生活の様相を語るものが、多数出土しました。とりわけ竪穴住居は、円形、六角形、方形など多様な平面形態の遺構が発見されており、当時の住居の形態の変遷の様子がしのばれます。

調査に際しましては、地元の皆さん、茨木市教育委員会、大阪府建築都市部住宅整備課並びに関係各位に多くのご協力いただきました。深く感謝申し上げます。引き続き、皆様方のご理解とご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

平成18年３月

大阪府教育委員会
文化財保護課長　丹上　務

例　　言

1．本書は府営西福井住宅（第２期）建て替え事業に伴って、大阪府教育委員会が実施した茨木市西福井２丁目に所在する福井遺跡の発掘調査報告書である。

2．大阪府建築都市部からの依頼を受け、文化財保護課 技師 横田 明を担当者として2004年８月２日から2005年３月23日まで現地調査を実施した。報告書作成にかかわる整理作業は、2005年度に調査管理グループ林日佐子、藤田道子が担当し、2006年３月に全ての作業を終了した。調査番号は04027である。

3．調査・整理に際して要した経費は、国土交通省の補助金を得て、大阪府建築都市部が全額を負担した。

4．調査の実施にあたっては、地元自治会をはじめ茨木市教育委員会、大阪府建築都市部住宅整備課など多くの方々の協力を頂いた。

5．本書に掲載した遺物の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。

6．航空写真測量は株式会社ワールドに委託して行った。なお撮影フィルムは同社において保管している。また土壌分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。

7．本書の執筆・編集は横田　明が行った。

8．本報告書は300部作成し、一部あたりの単価は886円である。

凡　　例

1．本書に使用した標高は、東京湾標準潮位（T.P）で記した。また位置表記は１次調査で行った地区割りを踏襲し、国土座標第Ⅵ座標系（旧座標 日本測地系）に基づいた。図面上の北は座標北をあらわしている。なお、X、Y座標値の単位はmで表示した。

2．遺構の規模については適宜mとcmを併用している。

3．本書に掲載している遺物は一連の通し番号を付けている。この番号は、本文挿図・図版写真ともに共通する。

目　　次

はしがき
例　　言
第１章　調査に至る経過 …… 1
第２章　調査の方法 …… 2
第３章　調査の成果 …… 4
　　第１節　福井遺跡Ｄ区 …… 4
　　第２節　福井遺跡Ｅ区 …… 8
第４章　まとめ …… 19
第５章　福井遺跡の古環境分析 …… 22

挿　図　目　次

第１図　福井遺跡位置図 …… 1
第２図　福井遺跡の地区割 …… 3
第３図　Ｄ区土層断面図 …… 4
第４図　Ｄ区主要遺構配置図 …… 5～6
第５図　Ｄ区包含層出土遺物実測図 …… 7
第６図　Ｄ区溝―3001出土遺物実測図 …… 7
第７図　Ｅ区土層断面図 …… 8
第８図　Ｅ区主要遺構配置図 …… 9～10
第９図　Ｅ区包含層出土遺物実測図 …… 11
第10図　Ｅ区遺構出土遺物実測図（１）…… 12
第11図　Ｅ区遺構出土遺物実測図（２）…… 13
第12図　竪穴住居１～３ …… 15
第13図　竪穴住居４～５ …… 17
第14図　福井遺跡遺構分布図 …… 20
第15図　調査地点の柱状図 …… 22
第16図　重鉱物組成および火山ガラス比 …… 24
第17図　主要珪藻化石群集の層位分布 …… 25
第18図　主要化石群集の層位分布 …… 26

付　表　目　次

表１　竪穴住居一覧表 ……19
表２　種実同定結果 ……27
表３　大型植物遺体の形態学的特徴 ……28

図　版　目　次

図版１　Ｄ区空中写真（東から）　Ｄ区全景（南から）
図版２　Ｄ区溝―3001（南から）　Ｄ区溝―3001断面
図版３　Ｅ区空中写真（北から）　Ｅ区全景（東から）
図版４　Ｅ区西側（東から）　Ｅ区東側（西から）
図版５　Ｅ区西端（北東から）　Ｅ区竪穴住居１・２・３（北から）
図版６　Ｅ区竪穴住居２・３（北から）　Ｅ区竪穴住居２・３・４
図版７　Ｅ区出土弥生土器　Ｅ区出土弥生土器
図版８　Ｅ区出土弥生土器　Ｄ区溝―3001出土須恵器
図版９　Ｅ区出土弥生土器　Ｄ区包含層出土土馬
図版10　大型植物遺体（１）
図版11　大型植物遺体（２）

第１章　調査に至る経過

福井遺跡は茨木市の中央に位置しており、弥生時代後期から平安時代にかけての遺構・遺物を出土する。当該地域は現在、府営西福井住宅の敷地となっている。西福井住宅は古くに建設された住宅で老朽化が進んでおり、府営住宅建て替えの一環として、高層建物での立て替えが大阪府建築都市部によって計画された。対象地域は紫金山古墳、海北塚古墳など学史上著名な古墳が多いところである。建築都市部住宅整備課と文化財保護課で協議を行った結果、事前に試掘調査を実施し、遺構・遺物の有無を確認することとなった。2000年10月に行われた試掘調査では弥生時代後期～中世にかけての多様な遺構・遺物が発見され、集落の存在が明らかになった。

試掘の結果を受けて2001年９月から翌年１月まで第１期建て替え工事に先立つ発掘調査を遺跡包蔵地内の西側地域で実施した。第１次調査では、古墳時代の掘立柱建物、竪穴住居などをはじめ、弥生時代～中世にかけての多様な遺構・遺物を検出し、勝尾寺川北岸での集落の展開が明らかになった。

今回の調査は第２期建て替え工事に先立つもので、期間は2004年８月２日～2005年３月23日まで、大阪府教育委員会文化財保護課が実施した。第１次調査の東側地域にあたり、北側に西北?南東方向にのびる幅17.2m、延長90ｍのトレンチ（Ｄ区）、南側に東西方向で幅15.2m、延長91.2mのトレンチ（Ｅ区）を設定して調査を行った。実際の調査はそれぞれ鋼矢板で土留めを行った後、Ｅ区から調査を開始、それからＤ区の調査をはじめた。

第１図　福井遺跡位置図（縮尺１：50,000）

第２章　調査の方法

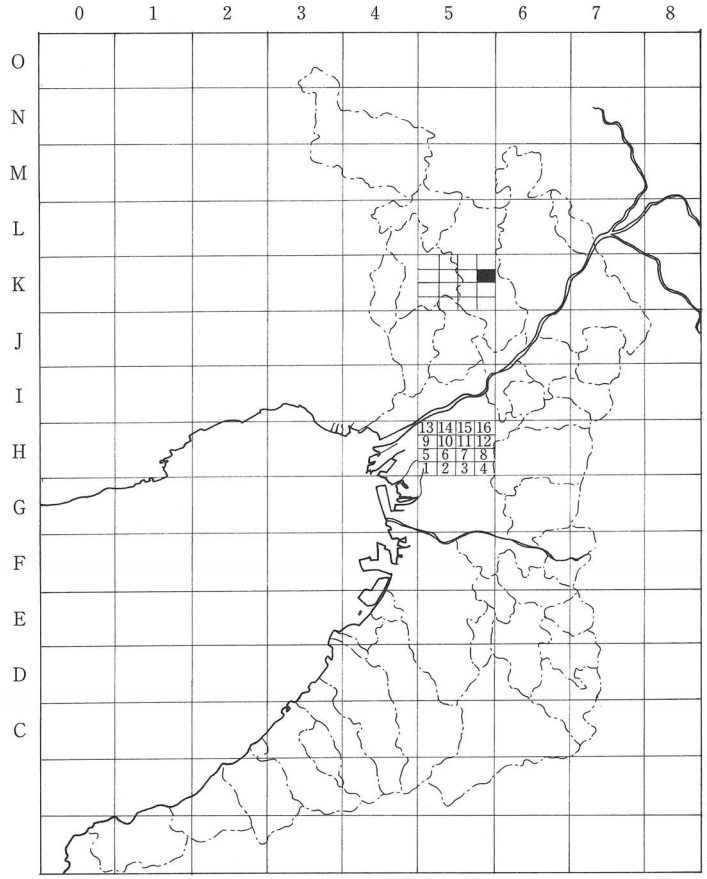
調査はＤ区、Ｅ区ともに、鋼矢板で土留工を行った後、盛り土および旧耕作土を機械力で除去し、それ以下の土層を人力によって除去した。遺物取り上げの単位である５×５ｍの区画は国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系）によって設定した。遺構番号は遺構の種別に関わらず通し番号とし、番号の前に溝、土坑など遺構の種別を明記した。ただし竪穴住居については付属のピット、土坑、壁溝なども総括して把握するために、別途、竪穴住居１、２、３、４、５という形で表記することとした。

位置の表記方法

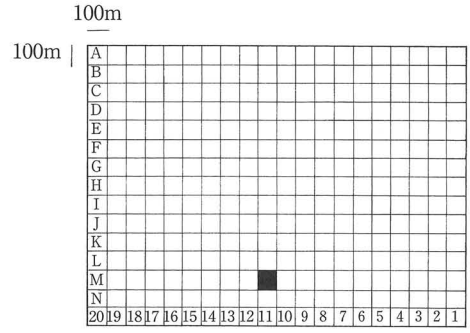
遺構の位置表示は、2002年度に実施した1次調査での地区割りを踏襲。国土座標第Ⅵ座標系（日本測地系）を使用してＸ、Ｙの座標で示している。本文挿図では遺構の位置は座標で示している。遺物を取り上げる単位は５×５ｍの区画単位で行った。

地区割

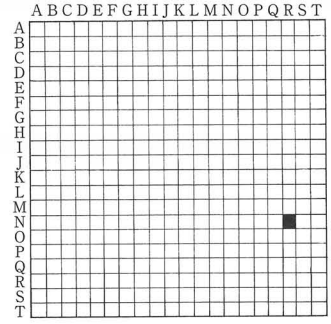
調査区の地区割りは１/2500の都市計画図を基本としてこの地図を300等分して100ｍ四方の区画をつくる。この区画はアルファベッドとアラビア数字を組み合わせて表示する。縦方向に15行（北から南へＡ～Ｏ）、横方向に20列（東から西へ１～20）があり、区画の表記については縦方向の属性を先頭にし、その続きに横方向の属性を表記する。たとえばＢ11のようにさらに100ｍ四方の区画を400等分して５ｍ四方の区画を作る。この区画はアルファベット2文字で表記する。縦方向には20行（北から南へＡ～Ｔ）、横方向には20列（西から東へＡ～Ｔ）であり、縦の属性＋横の属性で記載し、区画の名称としては、Ｍ11－ＪＨなどと表現される。遺物取り上げの際の地区名はこの区画名を記入する。

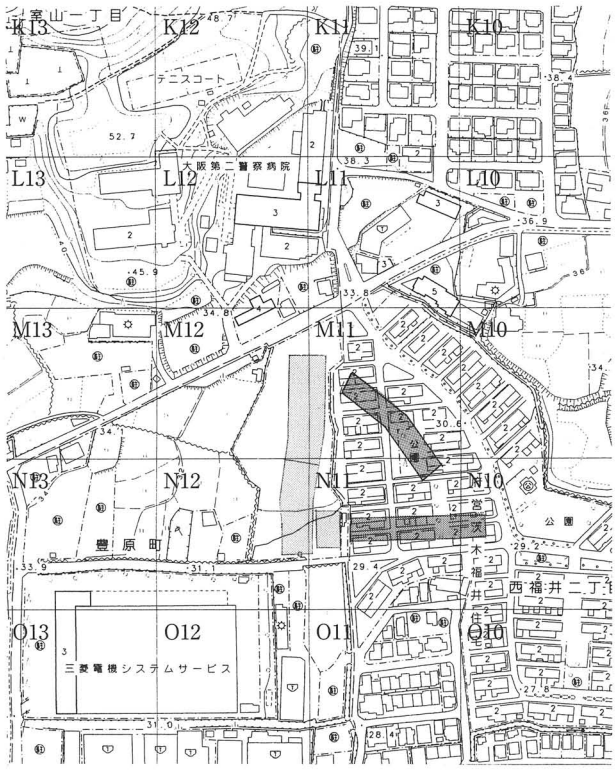


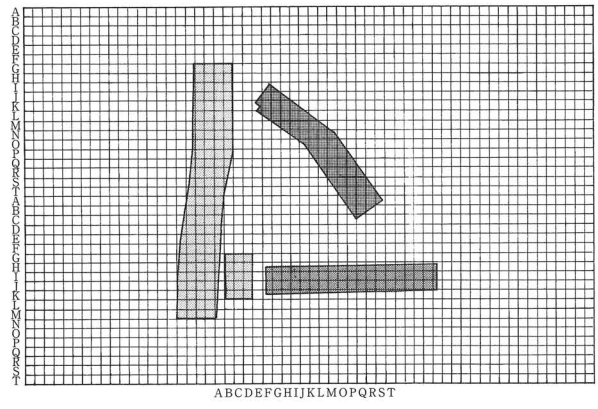
大阪府地域計画図の図割



5 m区画







第２図　福井遺跡の地区割

第３章　調査の成果

第１節　福井遺跡Ｄ区

基本層序と概要

Ｄ区は途中屈曲しながらも幅17ｍ、延長90ｍをはかる。現況地盤は敷地内でも北側が高く、南に行くにつれて低くなっている。住宅造成時の盛り土は厚さ２～３ｍにおよぶ。発掘調査に入る前に、既設の建物は取り壊され、整地された状態であった。

Ｄ区での基本層序は東壁で観察される土層を基準にしている。層序は第０層～第３層に分ける。

第０層　住宅造成した際の盛り土および旧耕作土に該当する。盛り土層は北側の方が厚く、層厚2.6～3.0m、旧耕作土は層厚0.1～0.2ｍで、削平を受けているのか断続的に残っているのみである。

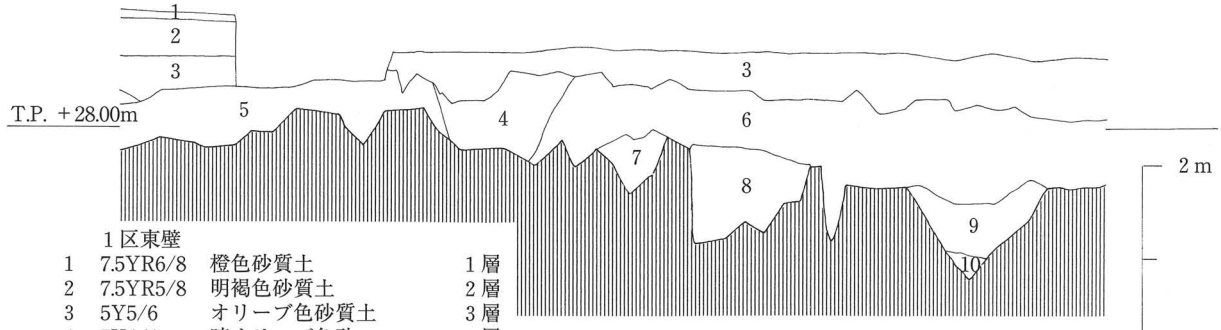
第１層　7.5YR5/8　明褐色砂質土。弥生土器から近世の染付けまでをも含む包含層である。層厚0.2ｍをはかる。府営住宅建設時点まで利用された耕作土層と推測される。調査区の北側でのみ確認されている。

第２層　5Y5/6　オリーブ色砂質土。中世の瓦器や近世陶磁器などを含んでいる。層厚20～30cmである。調査区南端部分では後世の削平を受けており残っていない。調査区の北端から３分の２くらいまでの地点で層として確認できる。中世以降の耕作に利用された層であるが、谷の堆積土である。

第３層　黒～オリーブ色系統の砂や粘質土である。弥生土器以外には、瓦器などの中世遺物を含んでいる。層厚20～50cmである。調査区のほぼ全域で確認される層群であり、谷の堆積土である。湧水が激しい層であり、層中からは自然遺物も多数出土する。

検出された遺構と遺物

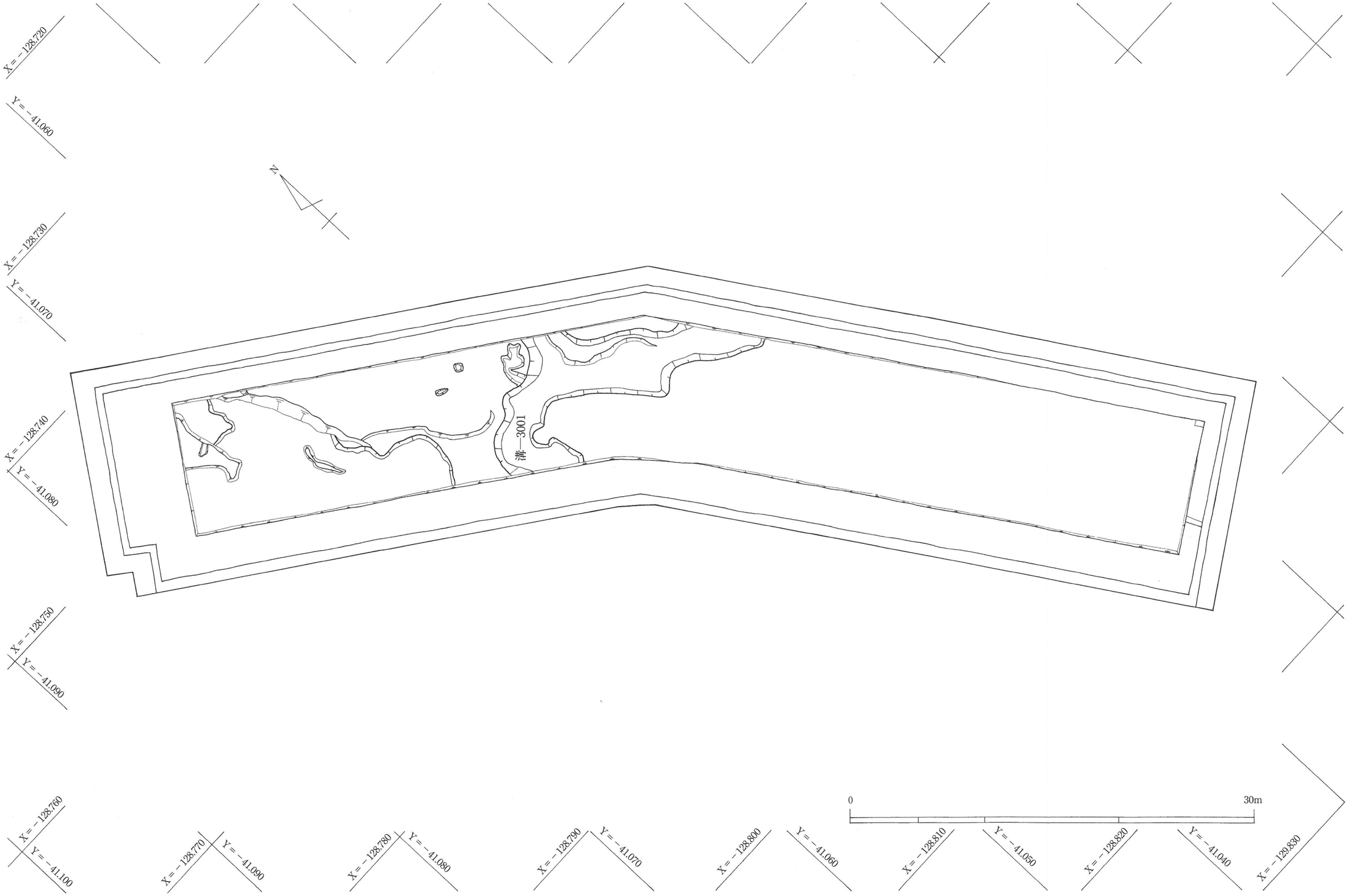
この調査区はほとんど全域が谷状地形の中におさまっており、顕著な遺構は少ない。谷底の堆



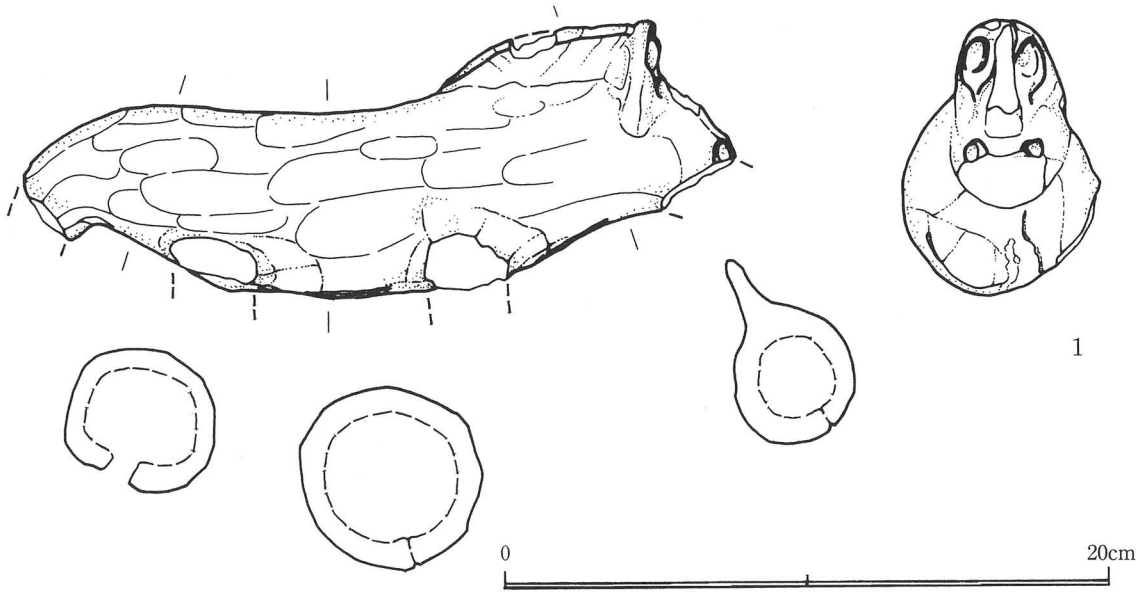
１区東壁

1	7.5YR6/8	橙色砂質土	１層
2	7.5YR5/8	明褐色砂質土	２層
3	5Y5/6	オリーブ色砂質土	３層
4	5Y4/4	暗オリーブ色砂	３層
5	7.5YR3/1	黒褐色砂質土	３層
6	2.5Y4/6	オリーブ褐色粘質土	３層
7	2.5Y4/4	オリーブ褐色粘質土（礫混じる）	
8	2.5Y4/4	オリーブ褐色粘質土（礫含む）	溝堆積
9	2.5Y3/1	黒褐色砂質土（炭ふくむ）	溝堆積

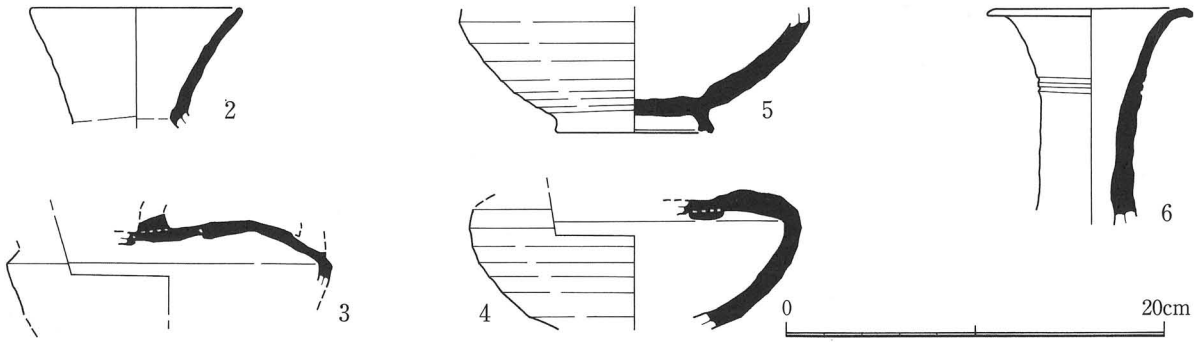
第３図　Ｄ区土層断面図



第４図　D区主要遺構配置図



第５図　D区包含層出土遺物実測図



第６図　D区溝―3001出土遺物実測図

積土にも瓦器などの中世遺物が含まれており、中世以降の堆積が主体となっている。弥生時代の堆積層は確認されていない。後世に押し流されたか、この谷自体が非常に新しい時期に形成されたものである可能性がある。

包含層出土遺物（第５図）

包含層には様々な遺物が含まれている。弥生土器にはじまり近世の染付けにいたるまで幅広い時期のものが含まれている。概して上・中層は近世遺物を含むが、下層は瓦器は含むが近世遺物は含まないといった傾向が見られる。しかし全体的に遺物量が少ない上に、図化可能なものはほとんどない。その中で注目されるべきものとして土馬がある。この土馬は全体的に灰色に固く焼け締まった須恵質の馬で、全長23.6cm、厚さ６cm、足は全て欠損しているばかりか、後端部も欠失している。タテガミは残っており、内部は中空である。

溝―3001

調査区中央部付近で発見された溝である。大きく曲がりくねっていて方向は一定せず、幅は３～５mをはかる。深さは30～40cmで、内部堆積土は、上層が2.5Y3/１黒褐色粘質土で、下層は2.5Y２/１黒色シルト（炭含む）が主体である。直上からは瓦器が検出されたが、溝内部からは

須恵器だけが出土している。古墳時代後期に属する遺構であると考えられる。

溝―3001出土遺物（第６図）

須恵器ばかりが出土している。２～４は提瓶で、６は長頸壷の頸部である。古墳時代の遺構は１次調査の際に多く出土している。西側に展開する遺構群と関連性のある溝だと思われる。

第２節　福井遺跡Ｅ区

基本層序と概要

福井遺跡Ｄ区の南側に東西方向に伸びるE区は幅16m、長さ93mの東西に長く延びる調査区である。ここでの基本層序は北壁を中心にしたものである。地表から２～2.5m下までが盛り土で、その下に旧耕作土層が続く。

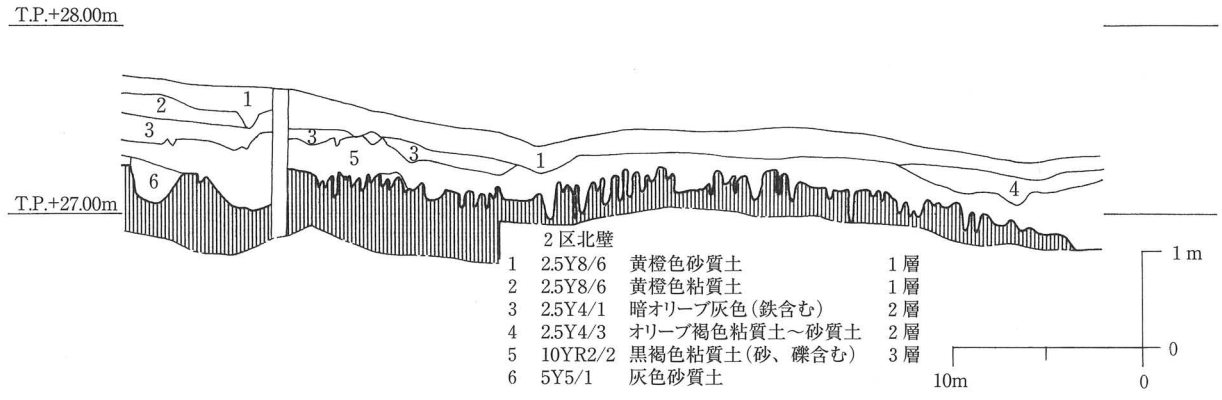
第０層　住宅造成した際の盛り土および旧耕作土に該当する。盛り土層は東側の方が厚くなっており、層厚2.1～2.6m、旧耕作土は層厚0.1～0.2mで、削平を受けているのか断続的に残っているのみである。

第１層　2.5Y8/6　黄橙色粘質土～砂質土である。中近世から府営住宅建設以前までの耕作土層に相当する。層厚10～20cmである。層中よりは弥生土器や古墳時代須恵器に混じって、近世陶磁器も出土している。

第２層　2.5Y4/1暗オリーブ灰色砂質土～2.5Y4/3オリーブ褐色粘質土が主体となっている。層厚10～15cmであり、Ｅ区でも西側において断続的に分布している。遺物は少ないものの、弥生土器や瓦器などが出土している。

第３層　10YR2/2黒褐色粘質土である。この土層についてはほぼ調査区全域で確認されている。層厚20～30cm、層中からは弥生土器を主体としながら、須恵器など古墳時代遺物も出土している。弥生時代遺構面を直接的に被覆している土層である。

第４層　5Y5/1灰色砂質土である。この層の上面が弥生時代遺構面であり、竪穴住居、土坑、溝などの遺構が多数検出されている。



第７図　E区土層断面図

X = − 128.820

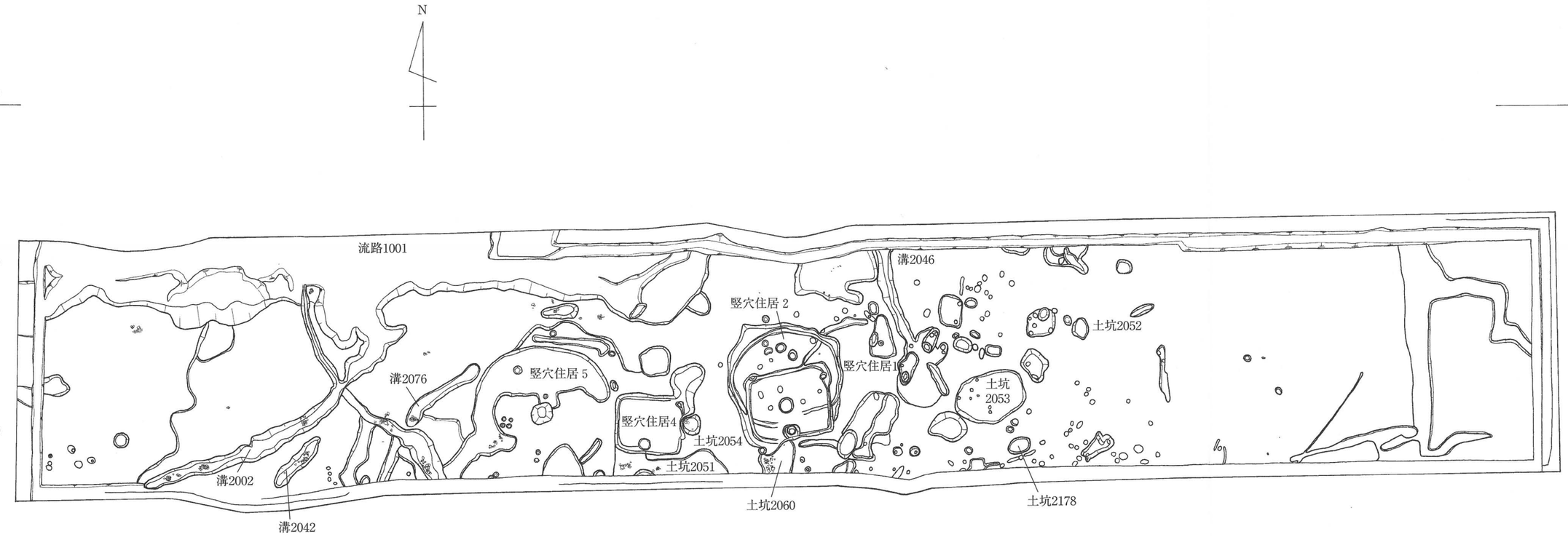
X = − 128.830

X = − 128.840

X = − 128.850

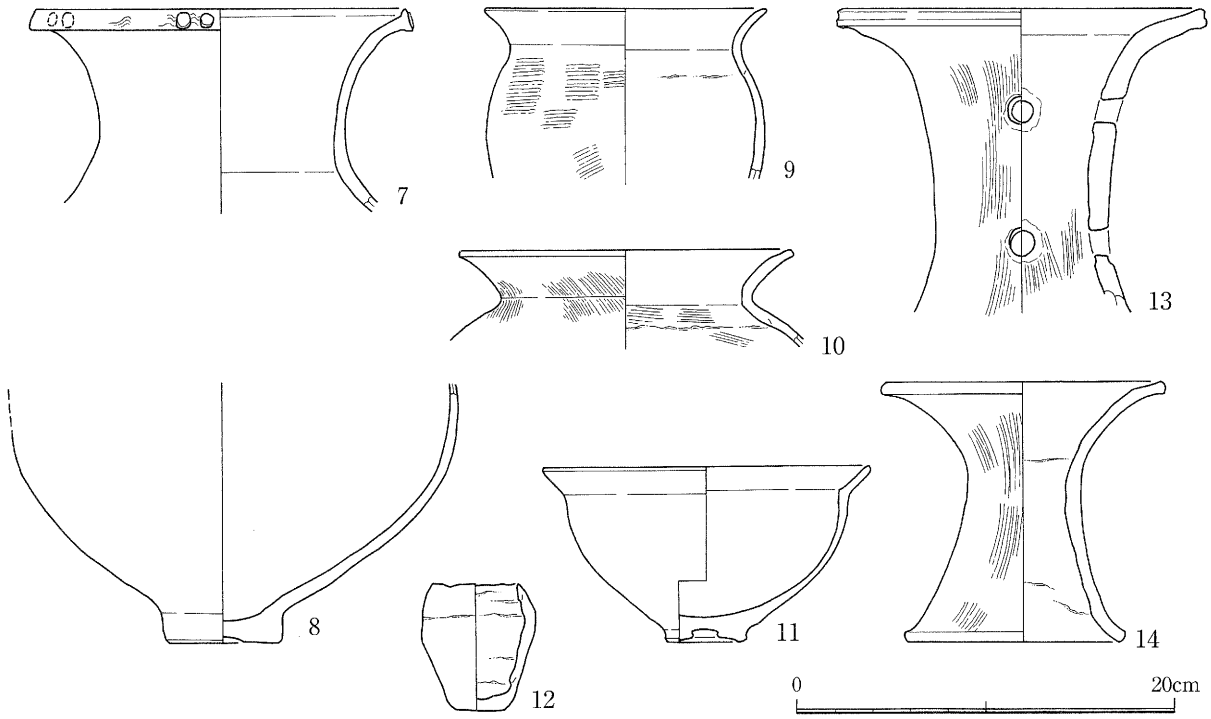
X = − 128.860

X = − 128.870



Y = − 41.070　Y = − 41.060　Y = − 41.050　Y = − 41.040　Y = − 41.030　Y = − 41.020　Y = − 41.010　Y = − 41.000　Y = − 40.990

第 8 図　E区主要遺構配置図



第９図　E区包含層出土遺物実測図

検出された遺構と遺物

E区包含層出土遺物（第９図）

主として遺構面直上の第３層から出土した遺物である。弥生時代後期を主体にして、壷、甕、鉢、器台などが出土している。７～８は広口壷である。９は口縁端部を上下に拡張し、円形浮文、波状文などを施している。９～10は甕である。11は小型鉢で口縁はくの字に屈曲している。12は製塩土器で、13～14は器台で内外面は縦方向の刷毛目で調整されている。

流路―1001　E区の西側で北壁に沿って流れる流路である。第１次調査のB区の南端で検出されている落ち込みの続きである。E区では流路の中央よりも南側だけが検出されていて、北側は調査区の外になる。深さは深いところで１mを超える。流路の下層には弥生土器破片が多く含まれているが、上層には瓦器を含んでいる。この流路はE区の途中まではまっすぐ進むが、中央付近で向きを北の方向に変え、調査区の外側にのびていく。

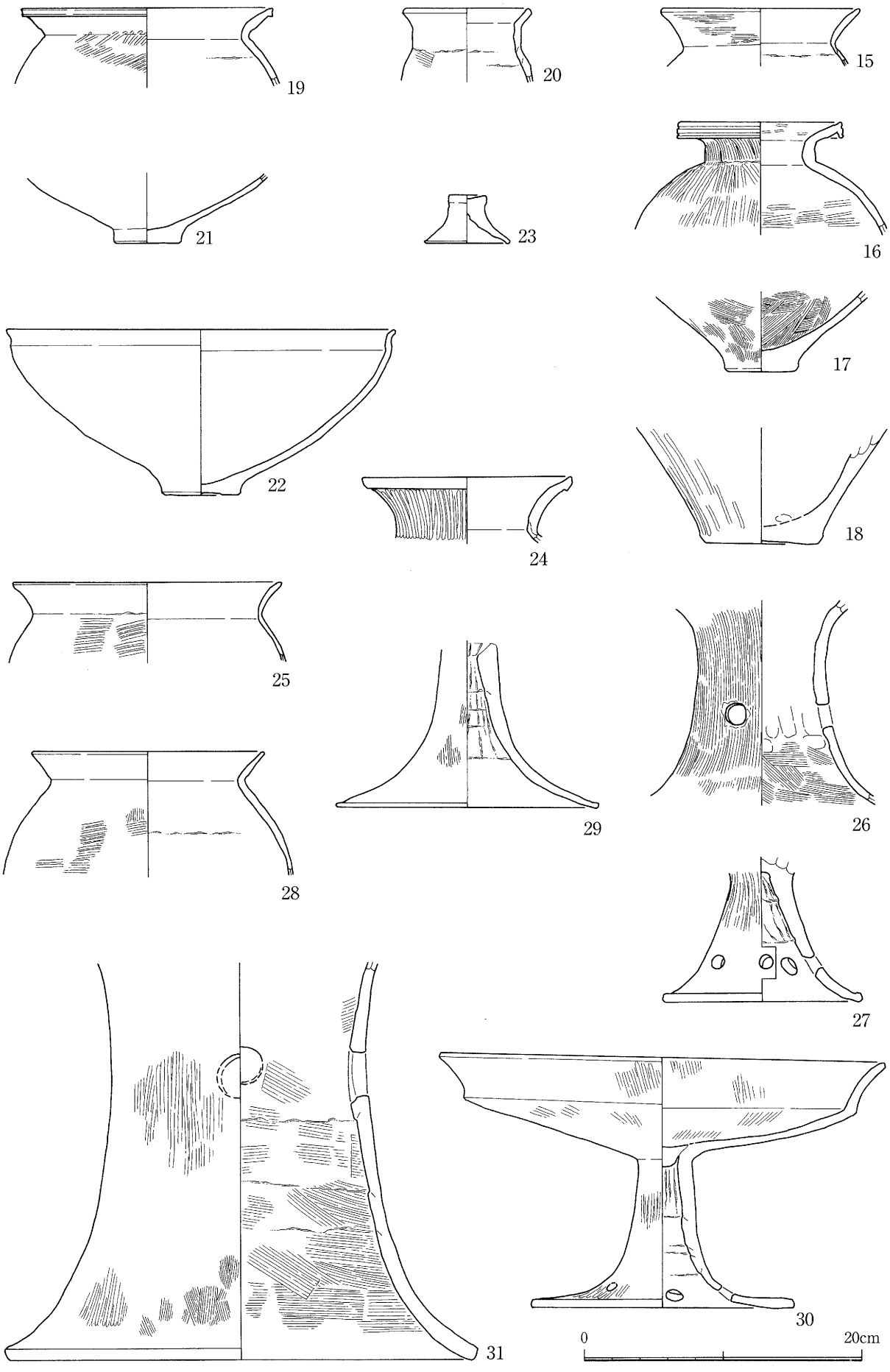
流路―1001出土遺物（第10図15～18）

流路―1001は上層は中世遺物を含むが、下層は弥生土器が主体である。15～18は壷である。16は二重口縁の壷である。口縁端部を拡張し、二重の沈線を施している。

溝―2002　E区でも西側に所在する溝である。途中でL字形に屈曲する形の溝である。幅40～150で、埋土は2.5Y5/6黄褐色砂質土である。

溝―2002出土遺物（第10図19～22）

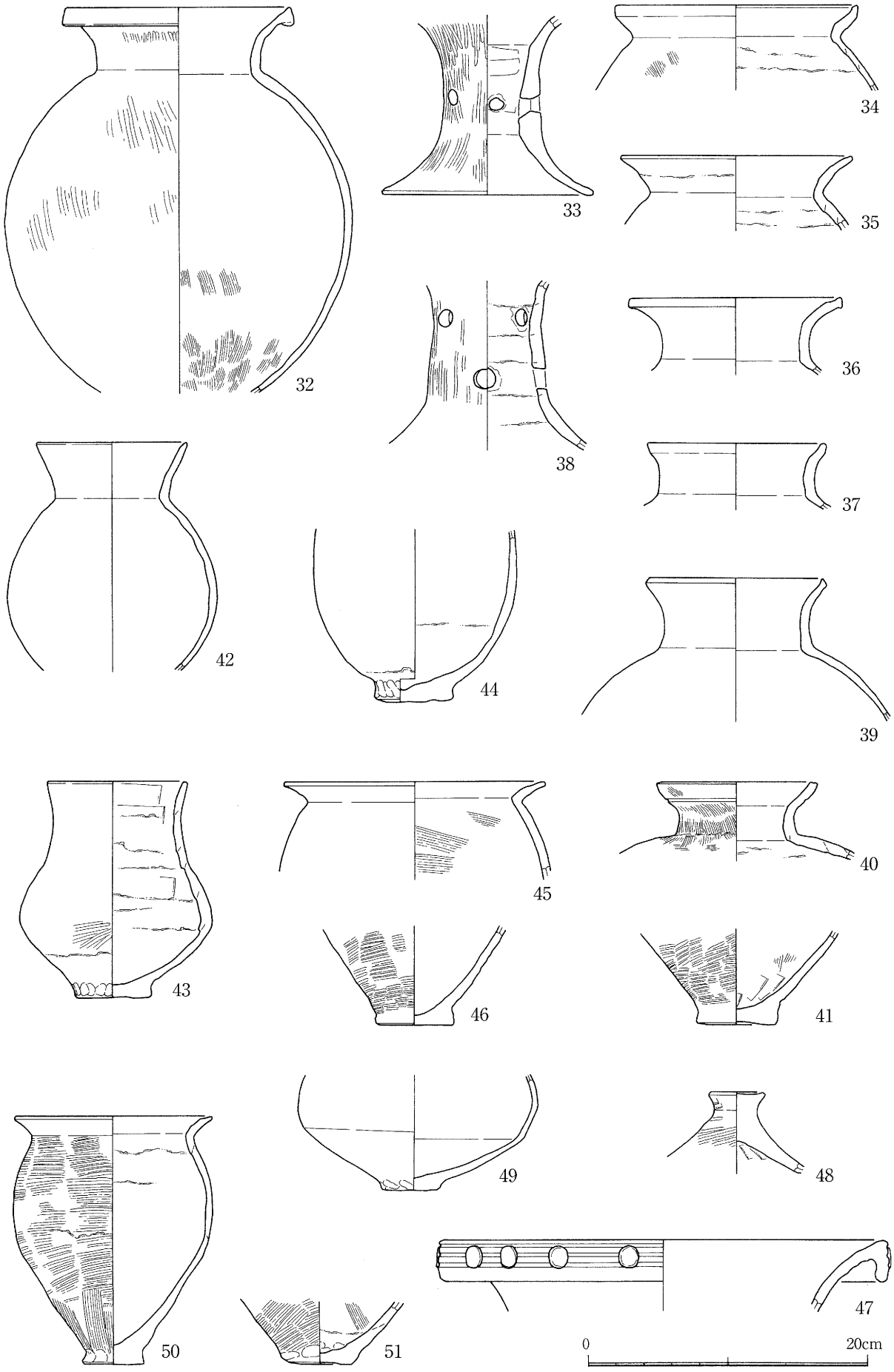
19～20は甕である。19は口縁がくの字形に屈曲しており、右斜め上向きにタタキが施されている。21～22は鉢である。低部は平坦で緩やかに湾曲しながら上方に伸び、端部はやや屈曲外



第10図　E区遺構出土遺物実測図（１）

流路―1001（15～18）　溝―2002（19～22）　溝―2042（23～25）

溝―2046（26～27）　溝―2060（28～30）　溝―2076（31）



第11図　E区遺構内出土遺物実測図（２）

溝―2076（32）　土坑―2012（33～38）　土坑―2051（39）　土坑―2052（40～41）　土坑―2054（42～46）
竪穴住居３（47）　竪穴住居４（48）　竪穴住居５（49～51）

湾気味におさめられている。

溝―2042　E区でも西側に所在する溝である。幅約70cm、延長４ｍ、深さ20～30cmの浅い溝である。

溝―2042出土遺物（第10図23～25）

24は壷の口縁部分であり、密なヘラミガキが施されている。25は甕で水平方向のタタキが施されている。

溝―2046　E区でも中央より東側に所在する溝である。幅約60～80cmで、深さ20～50cmの溝であるが、底にたまるようにいくつか土器が出土している。

溝―2046出土遺物（第10図26～27）

26は器台であり三方に円形の透かし穴が開けられている。27は高杯である。三方に透かし穴が開けられており、外面は縦方向の刷毛目、内面裾部は横方向の刷毛目調整されている。

溝―2060　E区でも中央に所在する溝である。竪穴住居３に切られている。幅約２ｍで深さ10～20cmの浅い溝であるが、底にたまるようにいくつか土器が出土している。

溝―2060出土遺物（第10図28～30）

28は甕である。口縁はくの字状に外反しており、外面胴部には横方向のタタキが施されている。30は有稜高杯である。外面は縦方向の刷毛目が残されており、内面にははっきりとしぼり目が残されている。

溝―2076　E区でも西側に所在する溝である。幅約50～80cm、延長5.5mで深さ10～20cmの浅い溝であるが、底にたまるようにいくつか土器が出土している。

溝―2076出土遺物（第10図31～第11図32）

32は広口壷である。摩滅していてあまりはっきりはしないが、内外面ともに刷毛目で仕上げられている。31は器台である。外面はミガキで仕上げられている。

土坑―2012　調査区中央よりも東寄りで、土坑―2053のすぐ西側に所在する土坑である。東西径2.2m、南北径1.7m、深さ30cm、埋土は上層2.5Y2/1　黒色粘土、下層2.5Y2/1　黒色粘質土で炭を含んでいる。

土坑―2012出土遺物（第11図33～38）

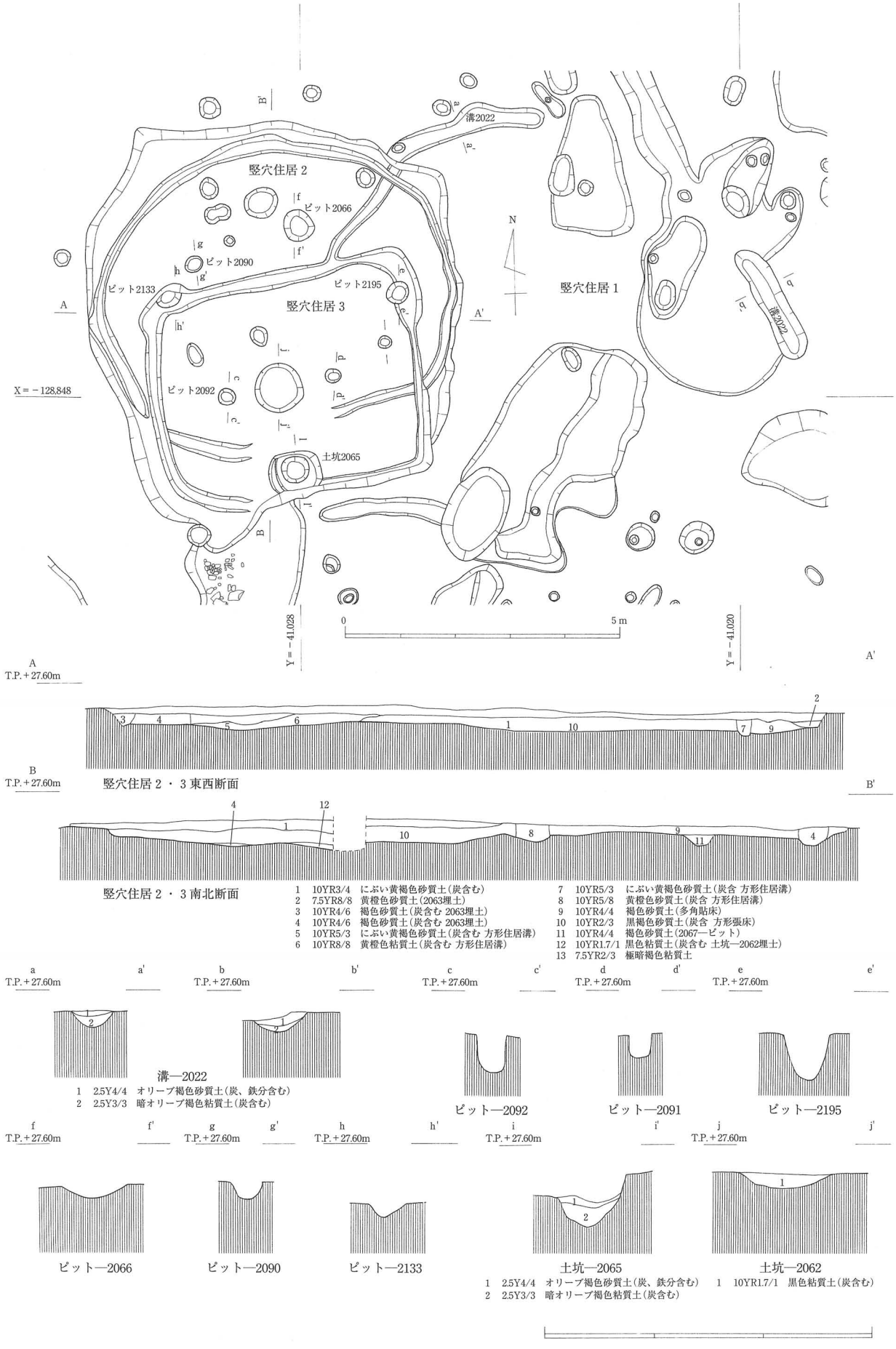
34～37は壷口縁部である。38は器台であり上下両端部が欠失しているが、外面には刷毛目が施されており、内面には接合痕が残っている。

土坑―2051　竪穴住居４の南側にあり、落ち込み状の土坑で、竪穴住居４に切られている。東西幅は７ｍで、深さ10cmである。

土坑―2051出土遺物（第11図39）

39は広口壷の上半部である。摩滅していて調整などは不明である。

土坑―2052　土坑―2053のすぐ東側に位置する土坑である。径1.3m、深さ20cmで、上層は10YR３／４暗褐色粘質土、下層は10YR2/3黒褐色粘質土である。


竪穴住居2
竪穴住居3
竪穴住居1
溝2022
ピット2066
ピット2090
ピット2133
ピット2195
ピット2092
土坑2065
N
X＝－128,848
Y＝－41,028
Y＝－41,020
0
5m
竪穴住居2・3東西断面
竪穴住居2・3南北断面
1 10YR3/4 にぶい黄褐色砂質土(炭含む)
2 7.5YR8/8 黄橙色砂質土(2063埋土)
3 10YR4/6 褐色砂質土(炭含む 2063埋土)
4 10YR4/6 褐色砂質土(炭含む 2063埋土)
5 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土(炭含む 方形住居溝)
6 10YR8/8 黄橙色粘質土(炭含む 方形住居溝)
7 10YR5/3 にぶい黄褐色砂質土(炭含 方形住居溝)
8 10YR5/8 黄橙色砂質土(炭含 方形住居溝)
9 10YR4/4 褐色砂質土(多角貼床)
10 10YR2/3 黒褐色砂質土(炭含 方形張床)
11 10YR4/4 褐色砂質土(2067―ピット)
12 10YR1.7/1 黒色粘質土(炭含む 土坑―2062埋土)
13 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土
溝―2022
1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土(炭、鉄分含む)
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土(炭含む)
ピット―2092
ピット―2091
ピット―2195
ピット―2066
ピット―2090
ピット―2133
土坑―2065
1 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂質土(炭、鉄分含む)
2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土(炭含む)
土坑―2062
1 10YR1.7/1 黒色粘質土(炭含む)

第12図　竪穴住居1～3

土坑—2052出土遺物（第11図40～41）

40は多少受口状の壷の口縁部で縦方向の刷毛目調整されている。41は甕の低部であり、やや右斜め上がりの細かなタタキを施している。

土坑—2053　E区の中央よりも若干東側に位置する楕円形状の不定形土坑である。東西径4.3m、南北径3.0m、深さ10～15cmで、埋土は7.5YR2/1　黒色粘質土（炭含む）である。

土坑—2054　竪穴住居4のすぐ東側に位置する土坑である。径約1m、深さ40～50cmで、黒褐色粘質土系統の土が堆積している。内部から壷を主体とし、弥生後期の土器が出土している

土坑—2054出土遺物（第11図42～46）

42～44は壷である。胴部はタマゴ形、タマネギ状などがあるが、摩滅のために調整は不明なものが多い。46は甕低部で、外面に水平方向のタタキ調整が施されている。

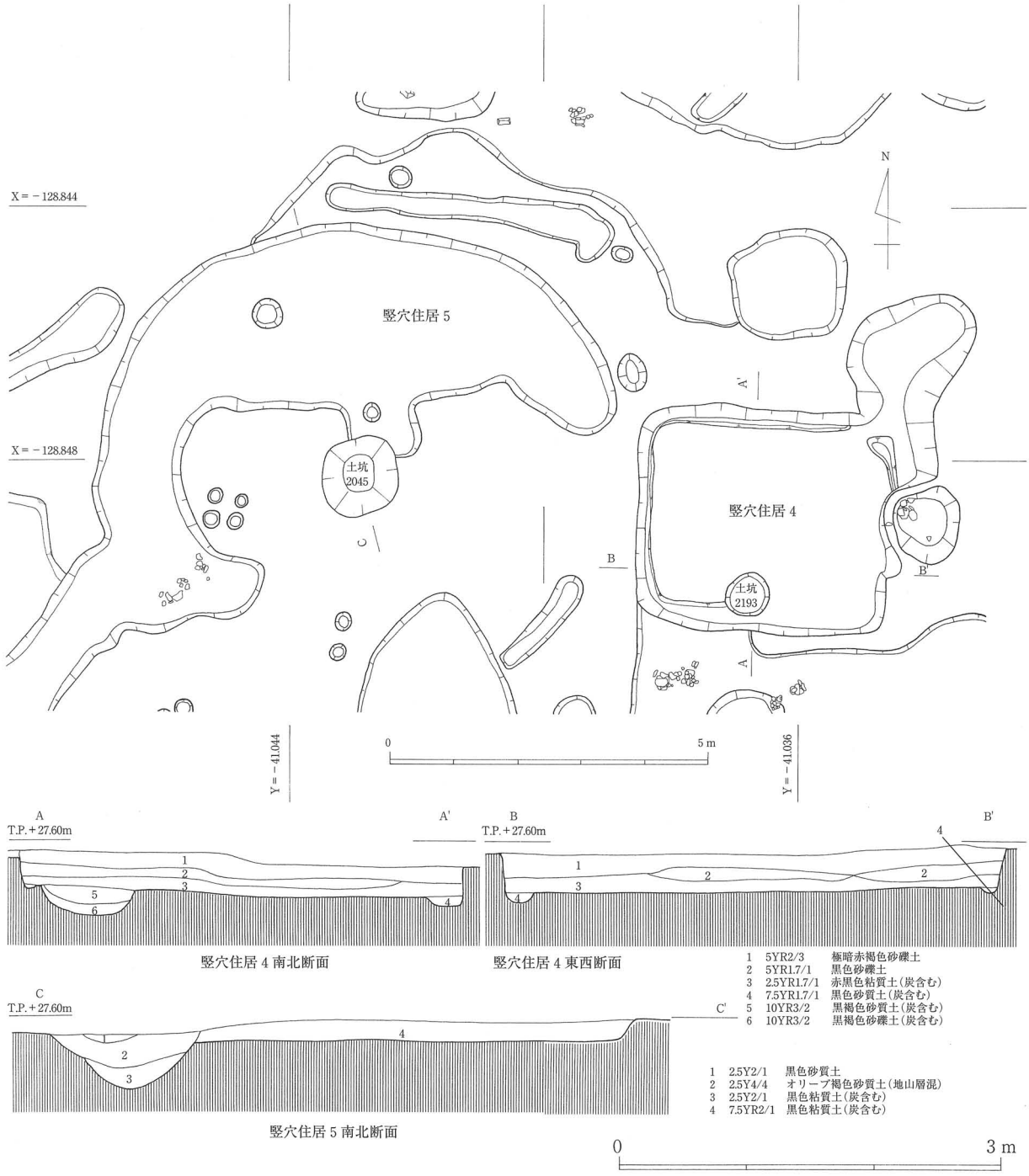
土坑—2178　土坑—2053のすぐ南側に所在する土坑である。東西径1.4m、南北径0.9m、深さ30cmである。上層は10YR 3 / 4 暗褐色粘質土、下層は10YR2/3黒褐色粘質土である。

竪穴住居1　調査区中央部から西よりにかけて5棟分竪穴住居が検出されており、そのうちの一番東にある住居が竪穴住居1である。南側は後世の削平を受けているのか、全く残っていない。北側の壁溝（溝—2022）の一部分が残るのみであるが平面形は円形であり、径は8～9mと復元される。後述の竪穴住居2に切られる形で存在していて、竪穴住居5棟の中では一番古いものである。この住居に伴う柱穴は明確ではない。特別な付属施設は確認できない。壁溝の幅は30～50cmであり、埋土は大きく2層に分けられる。上層は2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土（炭、鉄分含む）で、下層は2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土（炭含む）である。

竪穴住居2　E区の中央部で、竪穴住居1の西側で重なり合う平面六角形の竪穴住居である。円形の竪穴住居1を切り、方形の竪穴住居3に切られている。多少扁平な形の六角形で、柱穴の間隔は必ずしも揃ってはいないが、2m前後のものが多い。東西径7m、南北径5.5mであるが、北西が多少外側に向かってふくれている部分があり、その部分は柱穴の数も多いようである。一時期、建て替えあるいは拡張している可能性もある。壁溝（溝—2063）はほぼ完周するように残っており、幅20～30cmで、深さは10～15cm、埋土は10YR4/6褐色砂質土で炭を含んでいる。この住居跡に伴う付属施設としては土坑—2062がある。この土坑は深さ20cm程度の浅い土坑であるが、土坑底部には灰がたまっている。竪穴住居2に伴う焼土坑であるようだ。

竪穴住居3　E区の中央部にあり、竪穴住居2を切るようにして存在する方形住居である。東西径5m、南北径4.2mで、削平は受けているが、壁溝（溝—2061）はかろうじて全周分が残っている。壁溝の幅は20～30cmで、深さは10～15cm、埋土は10YR5/8　黄褐色砂質土（炭含）である。付属施設としては土坑—2065があり、東西径1m、南北径65cm、深さ25cmで、埋土は上下2層に分かれる。上層は2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土で、下層は2.5Y3/3暗オリーブ褐色粘質土であり、上下層ともに炭を含んでいる。この方形住居に伴う柱穴は特別には検出されなかった。

竪穴住居3出土遺物（第11図47）



第13図　竪穴住居４～５

47は二重口縁壷であるが、口縁部のみが残っている。端部を下方向に拡張し、三条の沈線と円形浮文を施している。

竪穴住居４（竪穴住居―2001）　竪穴住居１～３のすぐ西側にある方形の竪穴住居で、独立しており、他の住居とは重複していない。東西径4.0m、南北径3.5m、深さ20cmである。住居内堆積土は全体的に黒味がかった砂礫を多く含んだ層であるが、大きく上中下の3層に分かれる。上層は5YR2/3極暗赤褐色砂礫土、中層は5YR1.7/1黒色砂礫土、下層は2.5YR1.7/1赤黒色粘質土である。垂直に立ちあがる壁に沿って壁溝らしき痕跡が一周している。壁溝は幅20～30cm、深さ

10cmである。付属施設としては土坑—2193がある。土坑—2193は炭を含んでおり、埋土は10YR3/2黒褐色砂質土が主体である。

竪穴住居4出土遺物（第11図48）

48は蓋である。裾部は欠失しているが、外面には水平方向のタタキ目が残っている。

竪穴住居5（竪穴住居—2073）　E区における竪穴住居群では一番西側に位置するもので、平面形は円形である。削平されていて南側は消失しており、北側だけがくぼんだようにして検出されている。径8m、深さ10cmで、内部には2.5Y4/4オリーブ褐色砂質土が堆積している。柱穴は確認できなかった。ちょうど円形の中央部に土坑—2045がある。この土坑は径1.2m、深さ40cmで、3層にわかれる。炭を含んでおり、竪穴住居に伴う炉と思われる。

竪穴住居5出土遺物（第11図49～51）

49は細頸壷である。タマネギ状にふくらんだ胴部に平坦な底部であるが、摩滅のために詳しい調整は不明である。49～50は甕である。49は外面上部は水平方向の細かなタタキ、下部は縦方向の刷毛目調整をしている。

第4章　まとめ

福井遺跡は弥生時代後期、古墳時代、平安時代を中心とする遺跡である。今回の調査では、弥生時代後期を中心に、竪穴住居、土坑、溝など多様な遺構、遺物が発見されており、これらの遺構群は全て第4層を中心に形成されている。

弥生時代後期

流路—2001はE区の北寄りを東西に流れる流路である。第1次調査のB・C区からつづくものである。調査区中央付近で向きを北の方向に変え、調査区の外側にのびていく。上層は中世遺物を含むが、下層からは弥生土器だけが出土している。弥生時代の集落の北側を画する溝であったと思われる。

北側の調査区のD区では時期ははっきりしないものの、流路の痕跡が発見されている。また昨年度行われた第二警察病院改築に伴う調査でも東西方向の谷状地形が確認されている。このような谷と谷にはさまれた微高地上に点々と遺構が散在するような状況であったと思われる。

地形的にはE区よりもA・B区の方がレベル高で条件のいい場所である。しかしA・B区での弥生時代の遺構は明確ではなく、少なくとも竪穴式住居が検出される状況ではなかった。A・B区では古墳時代のある時期に削平が行われている可能性もある。

E区より検出された遺構や遺物はほとんどがこの時期のものにあたる。この時期の遺構としては、土坑、溝、ピットなど様々な遺構が検出されているが、この時期を特徴づける遺構は何と言っても5棟分検出された竪穴住居である。前述のようにこのうちの3基は切りあい関係にあることから、前後関係を追えるのである。これを表にすると下のようになる。

円形住居である竪穴住居1は切り合い関係から、一旦六角形住居である竪穴住居2に建て替えられた後に、最後は方形住居である竪穴住居3に建て替えられたことは明らかである。円形～六角形～方形と明確な形で平面形が変遷するのみならず、建て替えられる毎に規模が縮小していく様子が伺える。

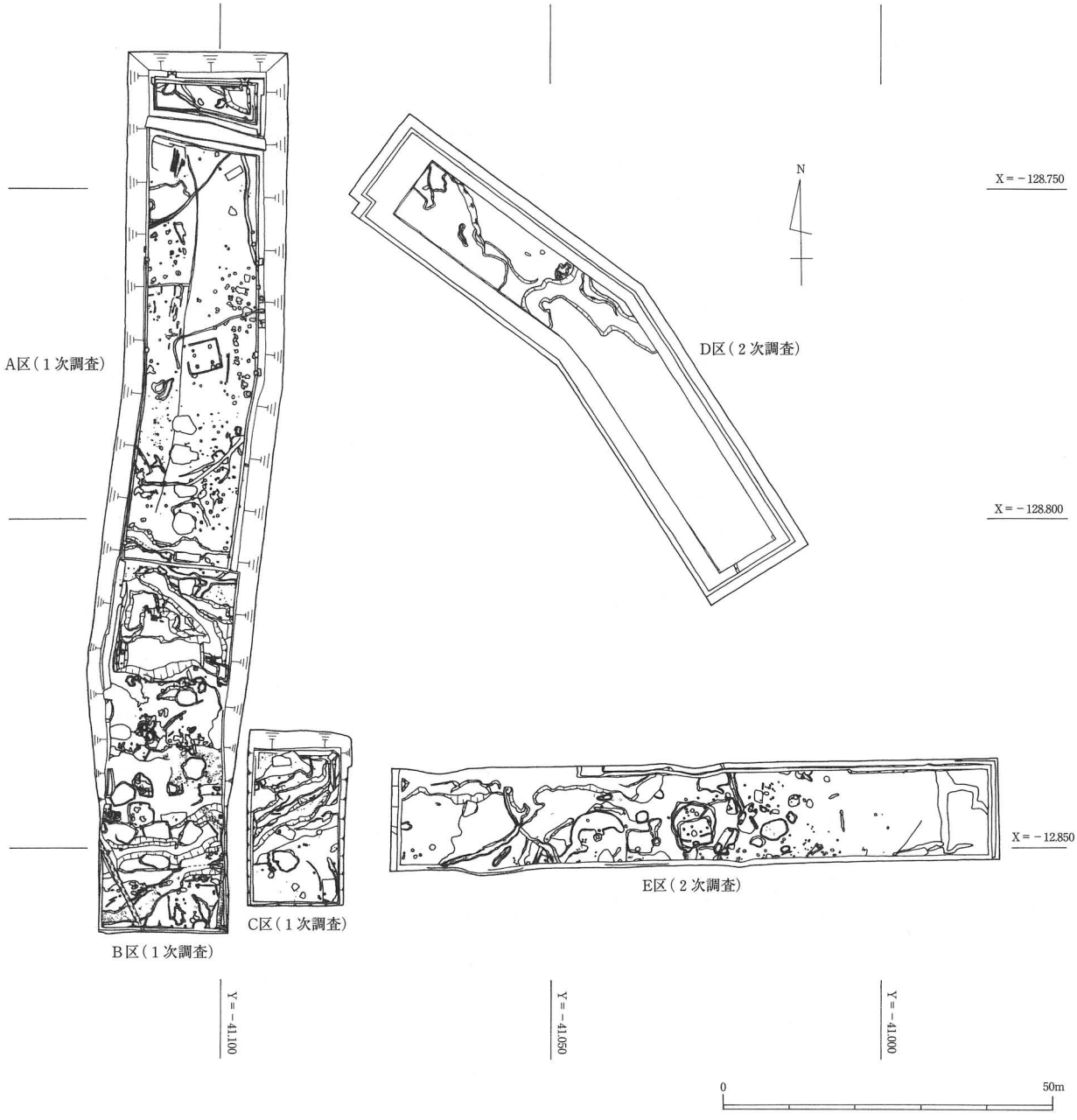
一方で方形住居である竪穴住居4と、円形住居である竪穴住居5は直接の切り合い関係は見と

表1　竪穴住居一覧表

住居名	形　状	径	住居名	形　状	径
竪穴住居1	円　形	8～9m（推定）	竪穴住居5	円　形	8m
（重複）	↓	（建て替え）			
竪穴住居2	六画形	東西7m、南北5.5m		↓	
（重複）	↓	（建て替え）			
竪穴住居3	方　形	東西5m、南北4.m	竪穴住居4	方　形	東西4m、南北3.5m

められないものの近接している。平面形からすると、竪穴住居１は竪穴住居５と、方形住居同士では、竪穴住居３と竪穴住居４が対応することも明らかである。調査区の範囲の関係から５基のみしか確認できてはいないが、一時期に最低２棟の竪穴住居が営まれたことになる。この遺構群は南にも広がると思われるが、この方向には勝尾寺川が控えている。多くても数基くらいの住居で構成される単位であったと思われる。

古墳時代　一次調査の際には、古墳時代後期を中心とした、掘立柱建物跡、竪穴住居跡などが出土している。今回の調査ではこの時期に相当する顕著な遺構は出土していない。ただＤ区で検出された須恵器を含む溝がこの時期に該当するのみである。遺構面のレベルで見ると、今回の調査区よりも一次調査区の方が２～３ｍ高くなっている。古墳時代については一番高いところにのみ



第14図　福井遺跡遺構分布図

小さくまとまる形で集落が存在したものと思われる。

Ａ・Ｂ区の東側は谷状に落ち込んでおり、その谷の向こう側は海北塚古墳の所在する尾根が所在する。当時は谷をはさんでＡ・Ｂ区と海北塚古墳のある尾根が東西にならぶような形であったことになる。

鎌倉時代　今回の調査においては顕著な遺構・遺物は検出していない。しかしＤ区をほとんど覆っていた谷状堆積の底からは瓦器が出土しており、この時期に谷の侵食・埋没がすすんでいるようである。また１次調査においても中世時期の遺物が発見されており、当該時期の生活痕跡が付近に存在したことは確実である。しかし近世以降の耕作によって削平されたのであろう。

第５章　福井遺跡の古環境分析

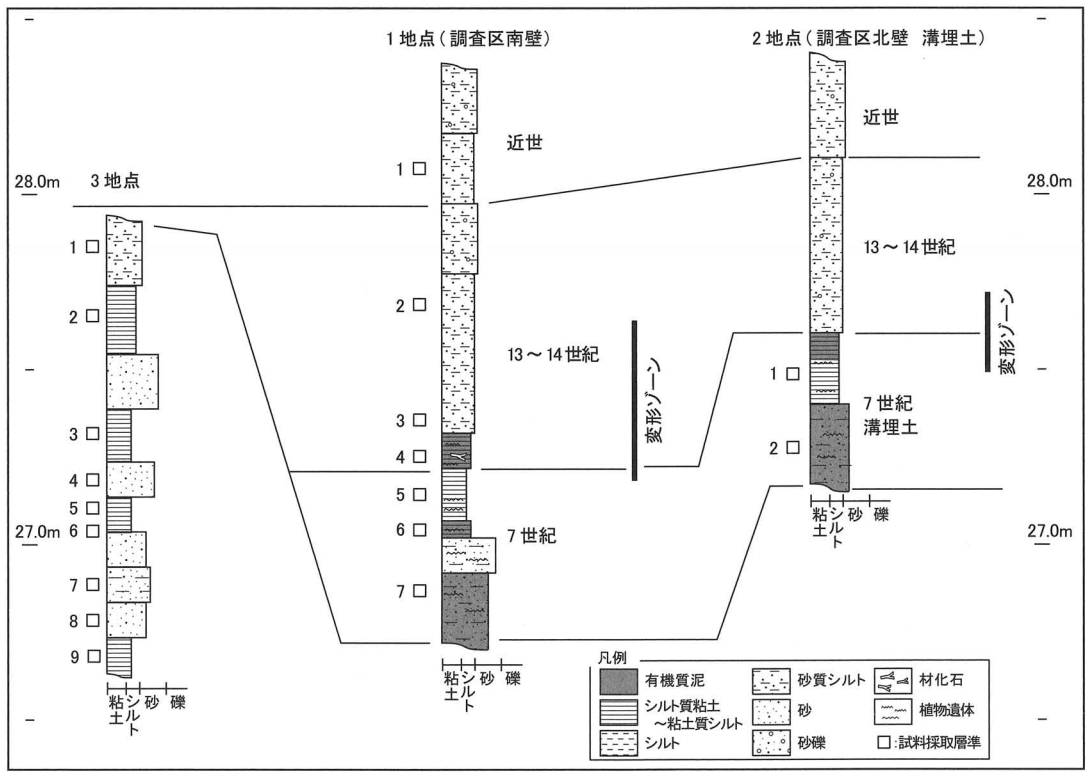
パリノ・サーヴェイ株式会社
田中義文・伊藤良永・松元美由紀・矢作健二

はじめに

福井遺跡は、茨木市西福井２丁目に所在する。本遺跡は、北摂山地・丘陵に隣接する台地ないしは扇状地面上に立地する。これまでの発掘調査によって、弥生時代後期の集落跡などが検出されている。今回の分析地点（１区）は、谷部の谷底部に相当し、弥生時代後期などの遺構遺物が確認される遺構検出面より２m前後、低所に位置する。調査の結果、7世紀代の遺物を包含する流路や中世から近世の人為的堆積物を含む谷埋め堆積物が確認されている。本報告では、遺跡およびその周辺の古環境復元を目的として実施した、花粉・種実・樹種・珪藻分析と鉱物分析について述べる。なお、鉱物分析・珪藻・花粉分析結果の一覧表は紙面の都合により割愛している（詳細は大阪府教育委員会に保管されている）。

１．試料

分析調査は、谷埋積物（１地点・４地点）、谷に連続する溝埋積物（２地点）、谷が浸食している基盤層（３地点）について実施する。各調査地点の模式柱状断面図と分析層準を図１に示す。



第15図　調査地点の柱状図

花粉・珪藻分析用試料は、谷埋積物１地点から７点、２地点から２点の計９点を採取した。７世紀に相当する試料は１地点の試料５～７と２地点の試料１・２の２点である。13～14世紀に相当する試料は、１地点の試料２～４、近世に相当する試料は、１地点の試料1である。種実同定用試料のうち、土壌試料は、１地点の試料４・５・７、２地点の試料２、４地点の試料１（１地点の試料７と同一層準）の５点である。単体試料は、１地点の試料4から単体で取り上げた種実遺体1点である。樹種同定用試料は、断面から採取された木材5点と、木製品（N11-RNゲタ）１点の計６点である。また、２地点から重鉱物組成+火山ガラス比分析用試料は、３地点の試料１～９の９点である。試料の詳細はそれぞれの結果に示す。

２．分析方法

（１）重鉱物組成十火山ガラス比

試料約40gに水を加え、超音波洗浄装置を用いて粒子を分散し、250メッシュの分析篩上にて水洗して粒径が1/16mmより小さい粒子を除去する。乾燥させた後、篩別して、得られた粒径1/4mm-1/8mmの砂分を、ポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離し、得られた重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒は「その他」とする。

火山ガラス比分析は、重液分離により得られた軽鉱物中の火山ガラスとそれ以外の粒子を、偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで計数し、火山ガラスの量比を求める。火山ガラスは、その形態によりバブル型、中間型、軽石型の３つの型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつぎ目をなす部分であるＹ字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く延びた繊維束状のものとする。

（２）珪藻分析

試料を湿重で７g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍で行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986,1988,1991a,1991b）などを参照する。結果は主要珪藻化石群集の層位分布図として示し、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率も同時に図示する。堆積環境の解析は、淡水生種は安藤（1990）、陸生珪藻は伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性は、Asai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

（3）花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）よる有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9，濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。結果は主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。

（4）種実同定

土壌試料を水に一晩液浸し、0.5mm目の篩を通して水洗する。試料を4mm，2mm，1mm，0.5mm目の篩を用いて粒径別にシャーレに移した後、双眼実体顕微鏡下で観察し、果実、種子や同定可能な葉などの大型植物遺体を抽出する。一方種実同定試料についても、双眼実体顕微鏡下で観察し、果実、種子や同定可能な葉などの大型植物遺体を抽出する。

種実の形態的特徴を所有の現生標本および原色日本植物種子写真図鑑（石川,1994）、日本植物種子図鑑（中山ほか,2000）等と比較して種類を同定し、個数を数える。微砕片を含むため個数推定が困難である種類は「＋」と表示した。分析後の大型植物遺体は、種類毎にビンに入れ、70%程度のエタノール溶液による液浸保存処理を施した。

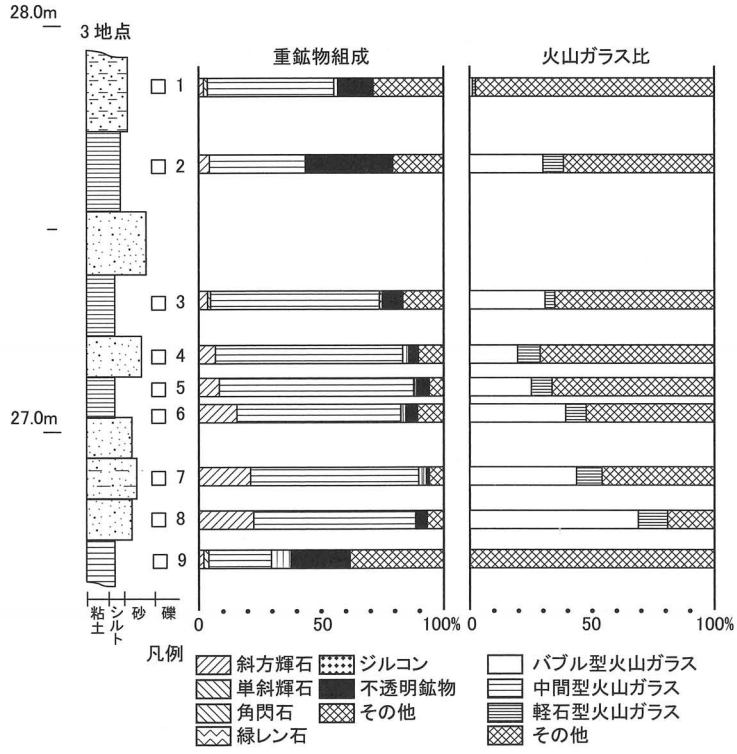
（5）樹種同定

剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。

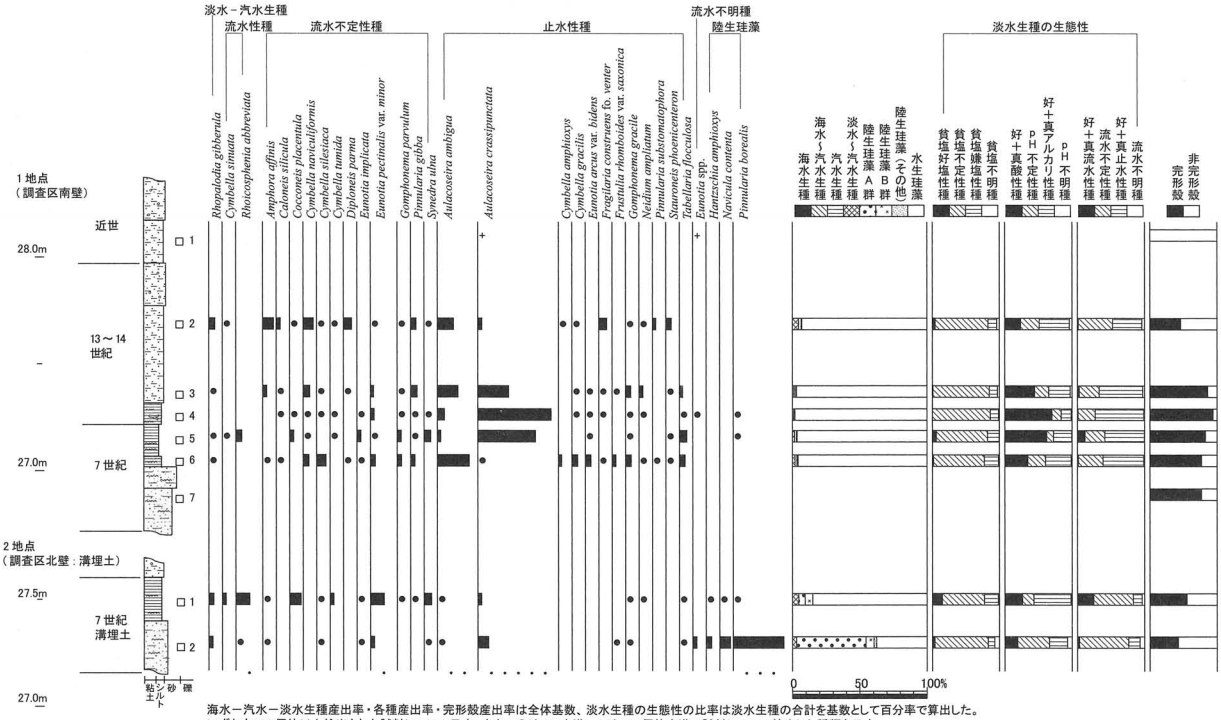
3．結果

（1）重鉱物組成十火山ガラス比

結果を図2に示す。重鉱物組成では、試料1から試料8までは、角閃石が多く、少量の斜方輝石と不透明鉱物を伴うという組成である。その中で、斜方輝石は、試料8で最も多く、上位に向かって減少する傾向が明瞭である。また、不透明鉱物は、試料2に比較的多



第16図　重鉱物組成および火山ガラス比



海水－汽水－淡水生種産出率・各種産出率・完形殻産出率は全体基数、淡水生種の生態性の比率は淡水生種の合計を基数として百分率で算出した。
いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、＋は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第17図　主要珪藻化石群集の層位分布

く含まれるが、特に層位的に傾向のある量比変化は認められない。試料９は、「その他」とした風化粒が多く、それを除けば角閃石と不透明鉱物がほぼ同量程度で主体を占め、これに少量の緑レン石を伴う。

一方、火山ガラス比では、試料８～試料２に無色透明のバブル型が多く含まれ、少量の軽石型も認められる。バブル型火山ガラスの量比は、試料８で最も多く、上位に向かって減少する傾向が明瞭である。試料9および試料１には火山ガラスはほとんど含まれない。

（２）珪藻分析

結果を図３に示す。珪藻化石の産状は、１地点の試料１が７個体、試料７は無化石であったが、それ以外は豊富に産出する。多産した試料の完形殻の出現率は、70%前後と化石の保存状態が良い。産出分類群数は、合計で31属143分類群である。地点別に珪藻化石群集の産状について述べる。

１地点：本地点は、淡水域に生育する水生珪藻が優占する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、全般的に貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真＋好酸性種（酸性水域に最もよく生育する種）、真＋好止水性種（止水域に最もよく生育する種）が多産する。

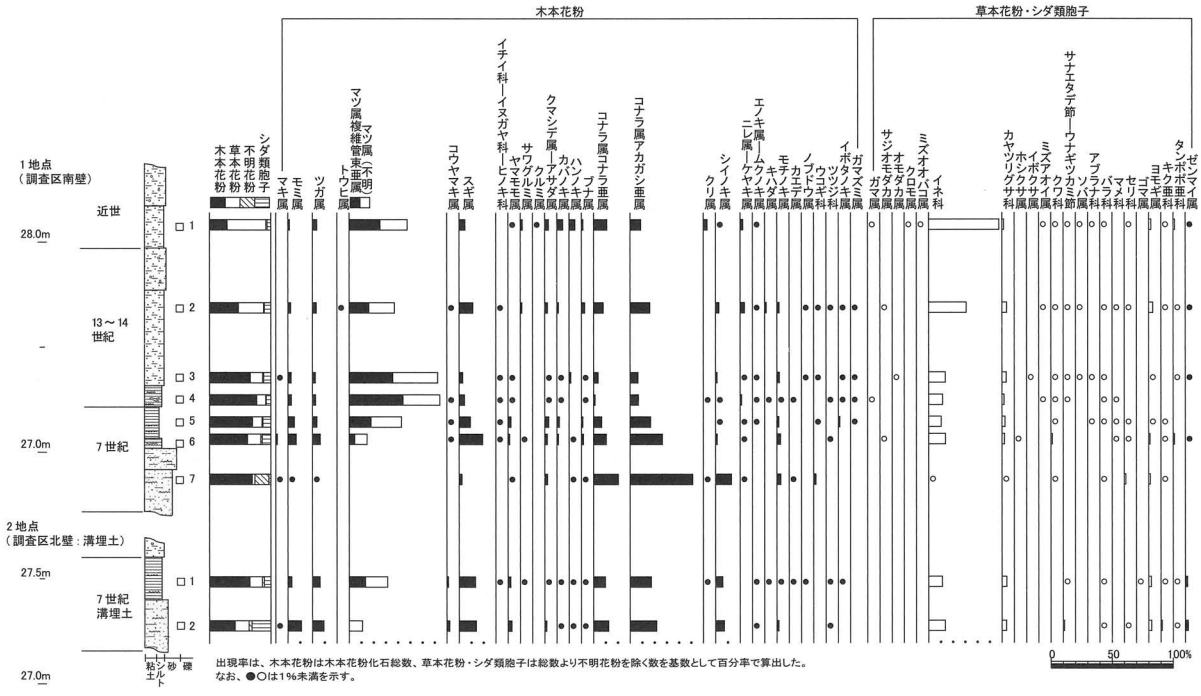
試料６は、止水性で湖沼沼沢湿地指標種群のAulacoseira ambiguaが約25%と多産し、止水にも流水にも生育する流水不定性のCymbella silesiaca、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis、Eunotia pectinalis var. minor、Pinnularia gibba、止水性のCymbella gracilis、Eunotia arcus var. bidens、Tabellaria flocculosa、それに止水性で沼沢湿地付着生種群

のGomphonema gracile等を伴う。湖沼沼沢湿地指標種群とは、湖沼における浮遊生種としても沼沢湿地の付着生種としても優勢に出現する種群、沼沢湿地付着生種群とは、水深が１ｍ前後で一面に水生植物が繁茂している沼沢や湿地で優勢な出現の見られる種群である（安藤，1990）。

試料５～３は、止水性で淡水付着性のAulacoseira crassipunctataが40%前後と多産し、湖沼沼沢湿地指標種群のAulacoseira ambigua、沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis、Eunotia pectinalis var. minor、Pinnularia gibba等を伴う。

試料２になると前試料で多産したAulacoseira crassipunctataは急減し、湖沼沼沢湿地指標種群のAulacoseira ambigua、流水不定性のAmphora affinis、Diploneis parma、流水不定性で沼沢湿地付着生種群のCymbella naviculiformis、Pinnularia gibba、止水性で偶来性浮遊性種（普段は、水生植物などに付着して生育しているが、基物から剥離した後は浮遊生活を営む種）のFragilaria construens fo. venter、止水性で沼沢湿地付着生種群のStauroneis phoenicenteron等を伴う。また、塩類や塩分を豊富に含む電気伝導度の高い水域に生育する淡水～汽水生のRhopalodia gibberulaを伴う。このうち、Fragilaria construens fo. venterは、有機汚濁の進んだ富栄養水域にも耐性のある好汚濁性種でもある。なお、化石の少なかった試料１は、海水～汽水生種のCyclotella striata－C. stylorumや化石の保存の悪い淡水生種が１～２個体産出したに過ぎない。

２地点：試料１と２とでは、珪藻化石の産状が異なる。試料１は、水生珪藻が優占するが、試料２は陸上のコケや土壌表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻が約60%と多産する。



第18図　主要花粉化石群集の層位分布

表２　種実同定結果

分類群		部位		地点・試料番号・分析量						備考
				4地点	2地点	1地点	1地点	1地点	1地点	
				試料1	試料2	試料4	試料4	試料5	試料7	
				200cc (319.6g)	200cc (359.8g)	200cc (264.5g)	単体	200cc (317.9g)	200cc (380.4g)	
木本	モミ属	葉	完	7	—	—	—	—	—	
			先端部	92	—	—	—	—	—	
			基　部	37	—	—	—	—	—	
	マツ属複維管束亜属	球果		—	—	—	4	—	—	
		葉	先端部	—	—	1	—	—	—	アカマツ含む
			基　部	—	—	8	—	—	—	
	マツ属	種子		—	—	9	—	—	—	
	イヌシデ	果実		2	—	—	—	—	—	
	コナラ属アカガシ亜属	幼果		2	—	—	—	—	—	
	ブナ科	果実	破　片	1+	—	—	—	—	—	
	マタタビ属	種子		1	—	—	—	—	—	
	ヒサカキ属	種子		19	—	1	—	—	4	
	サカキ	種子		4	—	—	—	—	—	
	キイチゴ属	核		2	—	—	—	—	2	
	ウルシ属	核		1	—	—	—	—	—	
	ブドウ科	種子		—	—	—	—	—	1	
	イイギリ	種子		—	—	—	—	—	1	
	タラノキ	核		—	—	1	—	—	1	
	ムラサキシキブ属	核		—	4	5	—	—	—	
	ニワトコ	核		1	—	—	—	—	—	
草本	ヒルムシロ属	果実		—	—	2	—	—	—	
	ヘラオモダカ	果実		—	—	13	—	15	—	
	オモダカ科	種子		—	—	5	—	3	—	
	イネ	穎		—	—	8	—	—	—	
	イネ科	果実		—	—	20	—	—	—	
	ホタルイ属	果実		—	3	184	—	—	—	
	カヤツリグサ科	果実		2	16	165	—	42	2	
	イボクサ	種子		—	1	21	—	13	—	
	ミズアオイ属	種子		—	—	3	—	—	—	
	カラムシ属	果実		—	—	—	—	4	—	
	タデ属	果実		—	—	4	—	—	—	
	トウゴクサバノオ	種子		2	—	—	—	—	—	
	タガラシ	果実		—	—	4	—	—	—	
	キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属	核		—	1	—	—	—	—	
	スミレ属	種子		1	—	—	—	1	—	
	チドメグサ属	果実		—	—	1	—	—	—	
	サクラソウ科	種子		—	1	—	—	—	—	
	イヌコウジュ属	果実		—	1	12	—	—	—	
	シロネ属	果実		—	—	—	—	2	—	
	アカネ科	核		—	—	—	—	—	1	
不明種実				8	1	8	—	5	—	
広葉樹				1+	—	—	—	—	—	
木の芽				4	—	—	—	—	—	
炭化材				+	+	+	—	+	+	
不明炭化物				+	+	+	—	+	+	
不明植物				+	—	—	—	—	—	
蘚苔類				+	—	—	—	—	—	
昆虫遺骸				14	1	4	—	3	—	

注）「＋」は、個数表示が困難な微砕片を示す。「数字＋」は、微砕片を含み、数字以上の個数が推定される分類群を示す。

試料２の主要種は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻Ａ群のPinnularia borealisが約40%と多産し、同じく陸生珪藻A群のNavicula contenta、Hantzschia amphioxysを伴う。

試料１は、流水不定性種と真＋好流水性種が多産する点で試料２とは異なる。主要種は、流水性で中～下流性河川指標種群のRhoicosphenia abbreviata、流水不定性のCocconeis placentula、Synedra ulnaが10%前後産出する。

（３）花粉分析

結果を図４に示す。１地点の木本花粉は、試料７ではアカガシ亜属が多産するが徐々に減少し、試料5より上位では出現率が逆転してマツ属の割合が高くなる。その他、モミ属、ツガ属、スギ

表３　大型植物遺体の形態学的特徴

モミ属（*Abies*）　マツ科

葉が検出された。葉は針状、偏平で、完形では20mm、幅２mm程度であるが、ほとんどが破片である。先端部は凹頭で、基部は楔状に細くなるが茎に接着する部分は吸盤状に丸く広がっている。裏面中肋の両側には、気孔帯がある。

マツ属複維管束亜属（*Pinus subgen. Diploxylon*）　マツ科

葉、球果、種子が検出された。球果は黒褐色、木質で円錐状広卵形体。長さ3～4cm、径2cm程度。長楕円状で矩形の種鱗が、覆瓦状、螺旋状に密着する。種鱗の外部露出部分は、不規則な四角形または五角形で肥厚し、横の稜線とその中央部に短く突起する臍点がみられる。葉は、基部、先端部などが検出されているが、完形なものはない。針状で推定される大きさは10cm程度。断面が半月形であることから、複維管束亜属であることがわかる。また、一部の試料について種子は淡褐色で大きさは5mm程度。いびつな長楕円形で、表面は薄くて堅く、ざらつく。種子は単維管束亜属との区別がつきにくいことから、マツ属(Pinus)とした。

イヌシデ（*Carpinus Tschonoskii Maxim.*）　カバノキ科クマシデ属

果実が検出された。灰褐色、広卵形、側面は広皮針形で先端は尖る。長さ4mm、幅3mm、厚さ1.5mm程度。果皮表面は平滑で、果皮両面にはそれぞれ６本程度の縦隆条が配列する。

アカガシ亜属（*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*）　ブナ科コナラ属

幼果が検出された。灰褐色、環状椀の殻斗に果実が包まれる。大きさは7mm程度。環状椀が破損しているものはブナ科とした。

マタタビ属（*Actinidia*）　マタタビ科

種子が検出された。茶褐色、楕円形で両凸レンズ形。破片の大きさ1.5mm程度。基部はやや突出し、切形。種皮は硬く、表面には円形・楕円形などの凹点が密布し網目模様をなす。

ヒサカキ属（*Eurya*）　ツバキ科

種子が検出された。茶～黒褐色、不規則な多角形でやや偏平、径1.5mm程度。一端に臍があり、臍の方に薄い。臍を中心に楕円形や円形凹点による網目模様が指紋状に広がる。

サカキ（*Cleyera japonica Thunberg*）　ツバキ科サカキ属

種子が検出された。黒褐色、円盤状。径2mm。一端にくぼみがある。表面は平滑、円形や楕円形の凹みによる網目模様が発達し、光沢が強い。

キイチゴ属（*Rubus*）　バラ科

核（内果皮）が検出された。淡黄褐色、半円形～三日月形。長さ1.5mm、幅１mm程度。腹面方向にやや湾曲する。表面には大きな凹みが分布し網目模様をなす。

ウルシ属（*Rhus*）　ウルシ科

核が検出された。茶褐色、いびつな楕円形でやや偏平。長さ3mm、幅4mm、厚さ1mm程度。背腹両面の中央部はわずかに凹む。表面はやや平滑。

ブドウ科（*Vititaceae*）

種子の破片が検出された。灰褐色、広倒卵形、基部の臍の方に向かって細くなり、嘴状に尖る。長さ3.5mm、径3mm程度。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形の深く窪んだ孔が存在する。同定に必要な背面を欠くためブドウ科にとどめる。種皮は柵状で薄く硬い。

イイギリ（*Idesia polycarpa Maxim.*）　イイギリ科イイギリ属

種子が検出された。褐灰色、広倒卵形。長さ2mm、径1.5mm程度。頂部に大きな円形の窪みがある。ここから基部の臍に向かって一本の溝がある。表面はスポンジ状の微細な網目模様があり、ざらつく。

タラノキ（*Aralia elata (Miq.) Seemann*）　ウコギ科タラノキ属

核（内果皮）が検出された。茶褐色、半月形でやや偏平。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。腹面はほぼ直線状で、片端に突起が見られる。背面には数本の浅い溝が走る。表面はざらつく。

ムラサキシキブ属（*Callicarpa*）　クマツズラ科

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、偏平で卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面は円みがあり、腹面中央はやや窪む。腹面方向に湾曲し、側面観は三日月形。中央部の内果皮が極めて薄く柔らかいため、破損してドーナツ状になっている。縁部分の内果皮は厚く、やや弾力がある。

ニワトコ（*Sambucus racemosa L. subsp. Sieboldiana (Miq.) Hara*）　スイカズラ科ニワトコ属

核（内果皮）が検出された。淡～黄褐色、広倒卵形で偏平。基部はやや尖る。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。背面は円みがあり、腹面の中央は縦方向の鈍稜をなす。腹面下端には小さな孔がある。内果皮はやや硬く、表面には横皺状模様が発達する。

ヒルムシロ属（*Potamogeton*）　ヒルムシロ科

果実が検出された。淡褐色、左右非対称な倒卵形で偏平。径3mm、厚さ1mm程度。先端に嘴状の太い花柱基部が残る。側面の正中線上に深い縦溝と稜があり、その基部に1個の刺状突起がある。果皮はスポンジ状でざらつく。

ヘラオモダカ（*Alisma canaliculatum A. Br. et Bouche*）　オモダカ科サジオモダカ属

果実が検出された。淡褐色、楕円形で偏平、基部は切形。長さ2.5mm、幅1.5mm程度。背部に深い縦溝が1本走る。果皮はスポンジ状で柔らかく、中の種子が透けてみえる。種子は茶褐色、倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

オモダカ科（*Alismataceae*）

種子が検出された。茶褐色、倒Ｕ字状に曲がった円柱状で偏平。径1mm程度。種皮は膜状で薄くやや透き通り柔らかい。表面には微細な網目があり縦筋が目立つ。

イネ（*Oryza sativa L.*）　イネ科イネ属

炭化した胚乳、穎の破片が検出された。胚乳は黒色、長楕円形でやや偏平。長さ5mm、幅3mm程度。一端に胚が脱落した凹部があり、両面はやや平滑で2-3本の縦溝がある。穎の破片は淡褐色で、基部、中間部などが検出されている。基部には果実序柄がある。穎は薄く、表面には特徴的な顆粒状突起が規則的に縦列する。

イネ科（*Gramineae*）

穎が検出された。淡褐色、狭卵形でやや偏平。長さ2mm、径1.5mm程度。穎は薄く柔らかくて弾力がある。表面には微細な網目模様が縦列する。

ホタルイ属（*Scirpus*）　カヤツリグサ科

果実が検出された。黒色で片凸レンズ状の広倒卵形。長さ2mm、幅1.5mm程度。背面は高く稜がある。先端部は尖り、基部から伸びる逆刺のある髭状の腕が残る。表面は光沢があり、不規則な波状の横皺が発達する。

カヤツリグサ科（*Cyperaceae*）

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を含んでいるものを一括した。カヤツリグサ属と思われる個体などを含む。

イボクサ（*Aneilema keisak Hassk.*）　ツユクサ科イボクサ属

種子が検出された。赤みがかった灰褐色で半横長楕円形。径2-2.5mm程度。背面は丸みがあり、腹面は平らである。臍は線形で腹面の正中線上にあり、胚は一側面の浅い円形の凹みに存在する。種皮は柔らかく、表面は円形の小孔が多数存在する。

ミズアオイ属（*Monochoria*）　ミズアオイ科

種子が検出された。淡褐色、楕円体。長さ1mm、径0.5mm程度。種皮は薄く透き通り、柔らかい。表面には縦に10本程度の隆起があり、隆起の間には横方向の密な隆線が配列する。

カラムシ属（*Boehmeria*）　イラクサ科

果実が検出された。淡黄褐色、非対称な広倒卵形で偏平。径1.2mm程度。先端部や基部は尖り、中央部は両凸レンズ形。果皮は薄く表面はざらつく。

タデ属（*Polygonum*）　タデ科

果実が検出された。形態上差異のある複数の種を一括した。黒褐色、三裂した広楕円体で径3mm程度。基部には萼片が大きく残る。先端はわずかに尖り、3花柱は欠損する。果皮は平滑で光沢が強い個体などを含む。

トウゴクサバノオ（*Isopyrum trachyspermum Maxim.*）　キンポウゲ科シロカネソウ属

種子が検出された。淡褐色、球形。径1mm程度。果皮は薄く、表面には小突起が密布する。

タガラシ（*Ranunculus sceleratus L.*）　キンポウゲ科キンポウゲ属

果実が検出された。広倒卵形～広楕円形でやや偏平。径1mm程度。縁は黄白色のスポンジ状で、中心部はやや凹み淡黄褐色で平滑。

キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属（*Potentilla-Duchesnea-Fragaria*）　バラ科

核(内果皮)が検出された。灰褐色、腎形でやや偏平。長さ1mm程度。内果皮は厚く硬く、表面はやや平滑～微細な網目模様がありざらつく。

スミレ属（*Viola*）　スミレ科

種子が検出された。灰褐色、広倒卵体。径1.5mm程度。基部は尖りやや湾曲する。頂部は円形の臍点がある。表面には縦方向に走る1本の縫合線がある。種皮は薄く、種皮表面は細い縦筋が走りざらつく。種皮内面は横長の細胞が配列する。

チドメグサ属（*Hydrocotyle*）　セリ科

果実が検出された。黄褐色、半月形でやや偏平。径1mm程度。一端には太い柄があり、合生面は平坦。果皮は厚く、やや弾力がある。表面には１本の明瞭な円弧状の稜がある。

サクラソウ科（*Primulaceae*）

種子が検出された。茶褐色、倒台形。背面は平らで、楕円状、菱形状、円形状などの4～5角形をなす。径1mm程度。腹面は長軸方向に薄くなり稜状で、稜上の中央付近に広線形の臍がある。表面は5～6角形の凹みによる網目模様がある。

イヌコウジュ属（*Mosla*）　シソ科

果実が検出された。淡～茶褐色、倒広卵体。径1.5mm程度。下端は舌状にわずかに突出する。果皮はやや厚く硬く、表面には大きく不規則な網目模様がある。

シロネ属（*Lycopus*）　シソ科

果実が検出された。淡褐色、広倒卵三角状三稜形。長さ1.5mm、径0.8mm程度。基部は切形で長楕円形の臍がある。背面は平らで、面の正中線は鈍稜をなす。両縁に翼をもつ。

アカネ科（*Lubiaceae*）

核が検出された。黒色、腎臓状偏球形。径2mm程度。腹面中央に深い楕円形や腎臓形の孔があり、その縁の一端に臍がある。核表面は粗面。

属、コナラ亜属、シイノキ属等が検出される。草本花粉ではイネ科が増加傾向を示し、試料７では１％未満であったものが。試料１では60％にまで増加する。その他、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属等、水生植物の種実遺体が検出されるが、種類数、出現率ともに上位で増える。また、試料３より上位でソバ属の花粉化石が検出される。

２地点では、木本花粉ではマツ属、スギ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイノキ属、モミ属、ツガ属などが検出されるが、際だって多い種類は止められない。一方草本花粉ではイネ科やカヤツリグサ科、ヨモギ属などが検出される。

（４）種実同定

結果を表１に示す。検出された種類は。全ての試料を通じて、木本16種類、草本植物20種類が確認された。各種類の形態的特徴を表２に示す。谷埋積物下部層準（４地点試料１・１地点試料７）では木本由来の種実が多産する傾向を示す。谷埋積物中・上部および溝埋積物では草本植物に由来する種実が多産する傾向があり、木本類ではマツ属などが僅かに認められる。

（５）樹種同定

樹種同定の結果、１地点試料１と同一層位の出土材はアカマツ、試料４と同一層位の出土材はアカマツ、２地点試料２と同一層位の出土材はアカガシ亜属である。１地点試料７と同一層位である4地点の木材はムクノキ、同じく流路中央地点から検出された木材はスダジイである。また木製品（N11-RNゲタ）はアカマツであった。各種類の形態学的特徴を以下に示す。

アカマツ（Pinus densiflora sieb. et zucc.）マツ科マツ属：軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は、柔組織、仮道管、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1-15細胞高。

コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科：放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高のものと複合放射組織とがある。

ムクノキ（Aphananthe aspera（Thunb.）Planchon）ニレ科ムクノキ属：散孔材で、横断面では角張った楕円形、単独または2-5個が複合して散在する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性、1-4細胞幅、1-20細胞高。柔組織は早材部では周囲状、晩材部では帯状が顕著に認められる。

４．考察

（１）調査区基盤層の層序

１区基盤層（３地点）の重鉱物組成および火山ガラス比の層位的な量比変化から、試料８採取層位付近に、無色透明のバブル型火山ガラスを主体とし、斑晶として斜方輝石を伴うテフラの降

灰層準のあることが推定される。試料７～試料２までの堆積層では、そのテフラに由来する砕屑物が常に取り込まれて堆積していった状況が窺える。降灰層準との隔たりが大きくなる上位の層ほど、取り込まれるテフラの砕屑物が少なくなっていったために、今回得られたような分析結果になったと考えられる。

試料８採取層位付近に降灰したテフラは、斜方輝石を斑晶として含むことと多量の無色透明のバブル型を主体とする火山ガラスから構成されることから、姶良Tn火山灰（AT：町田・新井,1976）に同定される。ATの噴出年代については、80年代後半から90年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか,1987　村山ほか,1993、池田ほか,1995　宮入ほか,2001など）から、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にある。一方、最近の海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は2.5～3.2万年前におよぶとされている（町田・新井,2003）。町田・新井（2003）は、ATの放射性炭素年代を暦年に換算することがまだ困難であると述べているが、上述の海底コアの年代観も考慮すれば、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている。したがって、３地点の試料８が採取された堆積層の年代も、その頃と考えて良い。

以上のことから、本調査区の基盤層は、低位段丘面構成層に対比されと判断される。

（２）珪藻化石からみた各地点の堆積環境

・１地点（調査区南壁）

谷埋積物下部にあたる試料7層準は、無化石であったことから珪藻分析結果から堆積環境について検討することは困難であった。その上位に累重する有機質シルト質粘土層（試料６）は、湖沼沼沢湿地指標種群のAulacoseira ambigua、が多産し、沼沢湿地付着生種群を伴うことが特徴である。本種は、汚濁に対する耐性では汚濁がある程度進んだ腐水域にも耐性のある広域適応性種とされる。これらのことから、有機質シルト質粘土層が形成期の調査地点は池沼～沼沢地のような止水域となっており、水質的には富栄養～中栄養を呈していたと考えられる。また、有機質シルト質粘土層の上位に累重する植物遺体を挟在するシルト質粘土層（試料５）から13～14世紀に形成された砂質シルト層下部（試料３）でも、淡水付着性のAulacoseira crassipunctataが優占することから、引き続き池沼のような状態であったことが推定される。ただし、水質的には、優占種のAulacoseira crassipunctataが模式地の北スコットランドでは標高が高く電気伝導度の低い貧栄養の泥炭池などで水生植物などに付着して生活する種とされている（Krammer & Lange-Bertalot,1991a）ことから、富栄養～中栄養から貧栄養へ変化した可能性がある。

13～14世紀の砂質シルト層中部（試料２）では、下位層準で優占したAulacoseira crassipunctataが減少し、再び湖沼沼沢湿地指標種群のAulacoseira ambiguaが多産するようになる。よって、本試料になると再び富栄養化した可能性が指摘される。これは、好汚濁性種や淡水～汽水性種が低率ながら産出することとも同調する。

近世以降に形成された砂質シルト層（試料１）は、珪藻化石が少なく、産出した珪藻殻のほとんどが壊れおり、異地性種と考えられる海水～汽水生種を含む。このことから、珪藻化石群集は現地性が低く、河川による氾濫等によって二次的にもたらされたものと考えられる。

・２地点（調査区北壁）

７世紀の溝埋土下部（試料２）は、陸生珪藻A群が多産することが特徴である。本試料が堆積する頃は陸生珪藻A群が生育するのに適した好気的環境に置かれており、溝内は乾いていたと考えられる。一方、試料１が堆積する頃になると、中～下流性河川指標種群を含む流水性種や沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種がみられることから、流れの影響を受けるようになったことが推測される。

（３）植物化石（花粉・種実・木材）からみた古植生

近畿地方の植生史は、湿原堆積物や沖積層のボーリングコアの花粉分析結果によれば、縄文海進最盛期以降になると、落葉樹が急速に減少し、アカガシ亜属を中核に、シイノキ属、ヤマモモ属、マキ属などいわゆる「照葉樹林」を形成する樹種群が優勢となる（前田,1984；古谷・田井,1993)。また、カシ類の増加より遅れて、温帯性針葉樹要素（モミ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科など）の花粉化石が増加し、これらは弥生時代前後に極大を迎える（高原,1998等）ことが確認されている。今回の古墳時代（７世紀）以降の花粉分析結果も、これら既往の成果と比較して、大きく矛盾するものではない。しかし、考古遺跡における花粉分析結果では、より詳細な時間スケールでの地域的な検討が可能であり、今回も本遺跡周辺の調査成果との比較から、各時代の古植生について検討する。

古墳時代（７世紀）：本時期の植物化石群集をみると、花粉化石群集では下位層準で卓越していた常緑広葉樹のアカガシ亜属が上位層準にかけて減少し、逆に針葉樹のマツ属が増加することが特徴として捉えられる。増加するマツ属復維管束亜属は二次林の代表的な樹種であることから、本遺跡周辺の森林植生は７世紀頃に大きく変化し、暖温帯性常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）の構成要素を主体とする植生において、ニヨウマツ類などの二次林が分布を拡げたことが推定される。一方、種実など大型植物遺体も下部層準では木本類が多く検出され、上位層準にかけて草本類主体の群集に変化することが確認される。下位層準ではモミ属が多く、マタタビ属、ヒサカキ属、サカキ、アカガシ亜属、ウルシ属、キイチゴ属などがみられる。これらの種類は周辺に生育していたとみられるが、それぞれの化石の残りやすさや生産量が大きく異なるため、検出量は周辺の植生の割合を反映していない。検出された種類のうち、モミ属やアカガシ亜属は、花粉化石でも多産しており、山地を中心に分布していたものとみられる。特にモミ属は谷沿いの斜面地など土地条件の悪い場所でも生育可能であることから、モミ属の植物遺体は河川によって集められやすく、流路内に集積しやすいと推測される。その他の種類は、林縁など明るい隣地を好む低木類であることから、これらは遺跡周辺の林縁部を中心に分布していたと考えられる。樹種同定結果でみられるスダジイやムクノキも、花粉化石群集と重複しており、周辺に生育していたと思

われる。一方、上位層準では木本植物がほとんど産出しなくなり、ヘラオモダカ・カヤツリグサ科・イボクサなどの水湿地に多い種類が認められるようになる。珪藻分析の結果をみると、上位ほど水深が浅く富栄養化の傾向が認められる。これらのことから、水深が浅くなって、これら抽水植物が谷内に進入してきた結果、植物遺体よって富栄養化が進行した可能性がある。なお、栽培種のゴマ属が古墳時代とされる層位から確認されているが、古代には広く栽培されていたと考えられているが、ゴマ属が花粉化石や種実などで多くみられるようになるのは中世以降である。このことから、今回の検出は古い部類に入るが、攪乱等による上位からの落ち込み等の可能性もあるので、慎重に評価する必要があろう。

ところで、本遺跡が位置する三島地方では、古墳時代の古植生に関する情報が安威川東岸の丘陵から台地にかけて展開する新池遺跡（松江,1993）、安威川の下流域の沖積低地に位置する溝咋遺跡（新山・鈴木,2000）、元茨木川の沖積低地に位置する玉櫛遺跡（新山,2003）で確認されている。これら各遺跡の古墳時代の花粉化石群集をみると、木本花粉の種類構成は各遺跡で類似するものの、各種類の産出率が遺跡によって異なっていることが認識される。丘陵・台地に近い新池遺跡と今回の福井遺跡では、アカガシ亜属やシイノキ属－マテバシイ属などの照葉樹林要素が多産する傾向にある。しかし、丘陵から離れた沖積低地に位置する溝咋遺跡や玉櫛遺跡では、これら照葉樹林要素のほかにスギ属・イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科といった温帯性針葉樹も多産する傾向にある。このような花粉化石群の地点間差異は、各遺跡における花粉化石群集の形成過程の違いに起因するものと考えられる。丘陵・台地に近い福井遺跡と新池遺跡の結果は、台地・丘陵の植生を強く反映した結果であり、沖積低地に位置する溝咋遺跡や玉櫛遺跡の結果は安威川や元茨木川流域の広い範囲よりもたらされた集水域の広い範囲の植生を反映した結果と解釈される。

また、各遺跡の花粉化石群集の層位的変化をみると、新池遺跡では古墳時代後期層準にかけて照葉樹林要素が減少し、逆にマツ属復維管束亜属や落葉広葉樹のコナラ亜属が増加する傾向が確認されている。この傾向は今回の結果とも類似し、沖積低地に位置する溝咋遺跡でも顕著ではないものの、類似する変化が確認されている。これらのことから、本地域における古墳時代の花粉化石群集の変化が地域的に普遍的なものであり、三島地方の台地・丘陵の植生が古墳時代頃に大きく変化していったことが推定される。植生変化の方向性は大略的に退行遷移方向であり、古墳時代における人間活動が要因として考えられる。三島地方では古墳時代の各時期を通じた古墳群の存在が確認されており、またそれに伴う埴輪生産関連遺構も確認されている（森田,1993）。今回の結果を含む、三島地方で確認された植生変化は、このような人間活動と連動した変化である可能性が高く、各遺跡における具体的な植生変化について今後さらに情報蓄積を行い、考古学成果との複合的解析が必要と考える。

中世（13～14世紀）から近世：花粉化石群集はマツ属の優占で特徴づけられるようになり、古墳時代の層準で多産したアカガシ亜属などの照葉樹林要素が減少する。マツ属は種実や木材で

も検出されている。マツ属の増加は、人間の生業に伴う植生干渉の結果、マツの二次林や植林が増えた結果であると考えられている（波田,1987　那須,1980など）。大阪平野におけるマツ属の増加は弥生時代末以降とされており（那須,1980など）、その変遷過程は地点によって異なっていたことが指摘されている（辻本,2004）。本地点の場合、７世紀では約10-20%の増加であり、中世（13～14世紀）層準で急増し、50%を超えるようになる。これらのことから、本遺跡周辺では、中世（13～14世紀）の時期になると、照葉樹林が減少し、マツ二次林を主とする植生に変化しており、古墳時代と比較して、植生破壊が著しく進行したことが示唆される。

また、中世の層準ではイネ科をはじめとする草本類が増加する。今回の結果では、イネ科草本類の増加に呼応して、水生植物（ガマ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属など）の種類数も増加し、上位で出現率も高くなる。一方、種実遺体も草本類が多量に検出されるようになるが、種類構成はヘラオモダカ、ホタルイ属、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ、タガラシなど水生植物や水生植物を多く含む分類群が多い。これらの種類の多くは水田雑草の種類でもあり、栽培種に着目すると、ソバ属花粉やイネの穎が検出されるようになる。以上の草本花粉の産状から、遺跡周辺は耕地化によって草本類が生育するような開けた空間が増えたことが推定される。上記した急激な森林植生の変化も、このような耕作地開発と密接に関連している可能性があり、今後、本地域における考古学調査成果に基づく耕作化の状況を踏まえた複合的解析が必要と考える。

（引用文献）

古谷　正和・田井　昭子,1993,大阪層群と段丘堆積層・沖積層の花粉化石.大阪層群,市原　実編著,創元社,247-255.

波田　善夫,1987,花粉分析からみたマツ林の歴史.松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究　―松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の撹乱とその動態について―資料集,財団法人　日本自然保護協会,41-49.

池田晃子・奥野　充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫,1995,南九州,姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14Ｃ年代.第四紀研究,34,377-379.

石川　茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

町田　洋・新井房夫,1976,広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－.科学,46,339-347.

町田　洋・新井房夫,2003,新編　火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗,1987,姶良Ｔｎ火山灰の14Ｃ年代.第四紀研究,26,79-83.

前田　安夫,1984,花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積（更新）世後期以降の植生変遷.日本植生誌　近畿,宮脇　昭編著,至文堂,87-99.

宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎,2001,姶良Ｔｎ火山灰のＣ-14年代のクロスチェック（演旨）.地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD-ROM）,2001,Qm-010.

松江　実千代,1993,新池遺跡周辺における古植生とその変遷.「高槻市文化財調査報告書　第17冊　新池新池埴輪製作遺跡発掘調査報告書」,高槻市教育委員会・高槻市埋蔵文化財調査センター,314-332.

村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦,1993,四国沖ピストンコア試料を用いたＡＴ火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の１４Ｃ年代－.地質学雑誌,99,787-798.

中山　至大・井之口　希秀・南谷　忠志,2000,日本植物種子図鑑.東北大学出版会,642p.中村　純,1967,花粉分析.古今書

院,232p.

那須　孝悌,1980,花粉分析からみた二次林の出現.関西自然保護機構会報,4,.3-9.

新山雅広・鈴木　茂,2000,溝咋遺跡遺構堆積物中の花粉化石群集.「(財) 大阪府文化財調査研究センター調査報告書第49集　大阪府茨木市学園町所在　溝咋遺跡（その1・2)　－茨木・学園町地区埋蔵文化財発掘調査１次・２次報告書ー本文編」,(財) 大阪府文化財調査研究センター,328-342.

新山雅広,2003,2.玉櫛遺跡の花粉化石群集.「(財) 大阪府文化財センター発掘調査報告書　第59周　玉櫛遺跡「　－大阪府営茨木玉櫛住宅（建て替え）新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」,財団法人　大阪府文化財調査研究センター,150-159

鈴木　茂,2002,第2節　宿久庄西遺跡の花粉化石.「(財) 大阪府文化財センター調査報告書第80集　宿久庄西遺跡　－都市計画道路事業茨木箕面丘陵線に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘調査－」,(財) 大阪府文化財センター,100-103.

高原　光,1996,近畿地方の植生史.図説　日本列島植生史,安田　喜憲・三好　教夫編,朝倉書店,114-137.

辻本裕也,2004,第6章　久宝寺遺跡の自然科学分析.「(財) 大阪府文化財センター調査報告書　第118集　八尾市　久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書ヲ　－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査－」,財団法人大阪府文化財センター,174-187.

報告書抄録

ふりがな	ふくいいせき
書名	福井遺跡 Ⅱ
副書名	
巻次	
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2005－2
編著者名	横田　明
編集機関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所在地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　　TEL 06-6941-0351
発行年月日	2006年３月31日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″		(㎡)	
ふくいいせき 福井遺跡	いばらきしにしふくい 茨木市西福井 ２丁目地内	27211	530	34° 50′ 17″	135° 33′ 1″	平成16年８月２日～ 平成17年３月23日	2879	府営西福井住宅建設事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
福井遺跡	集落	弥生時代	流路、溝、土坑、 竪穴住居	土器、木器 石器	
		古墳時代	溝	土器	

図　　版

調査区遠景（東から）

図版1

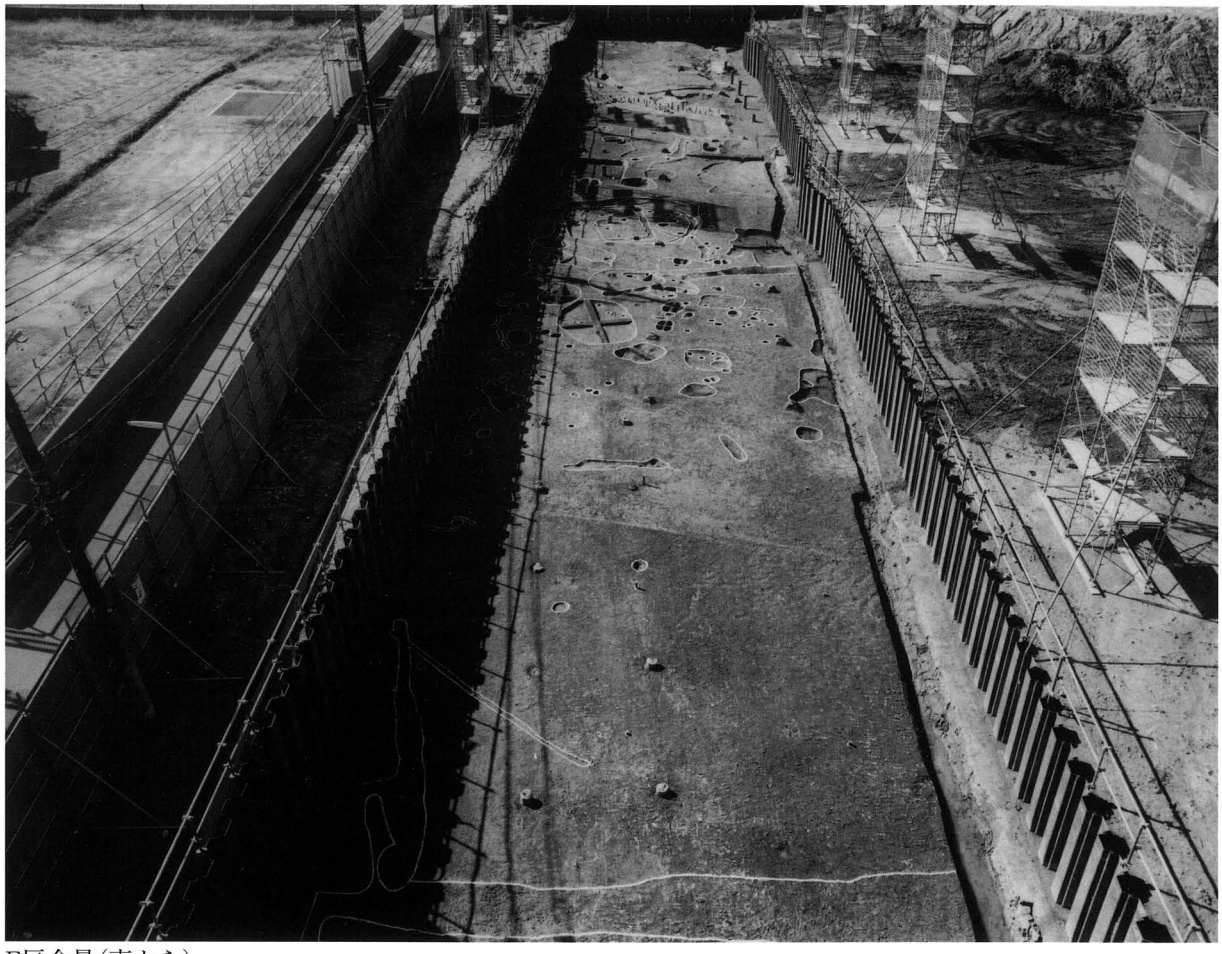
D区空中写真（東から）

D区全景（南から）

D区溝－3001（南から）

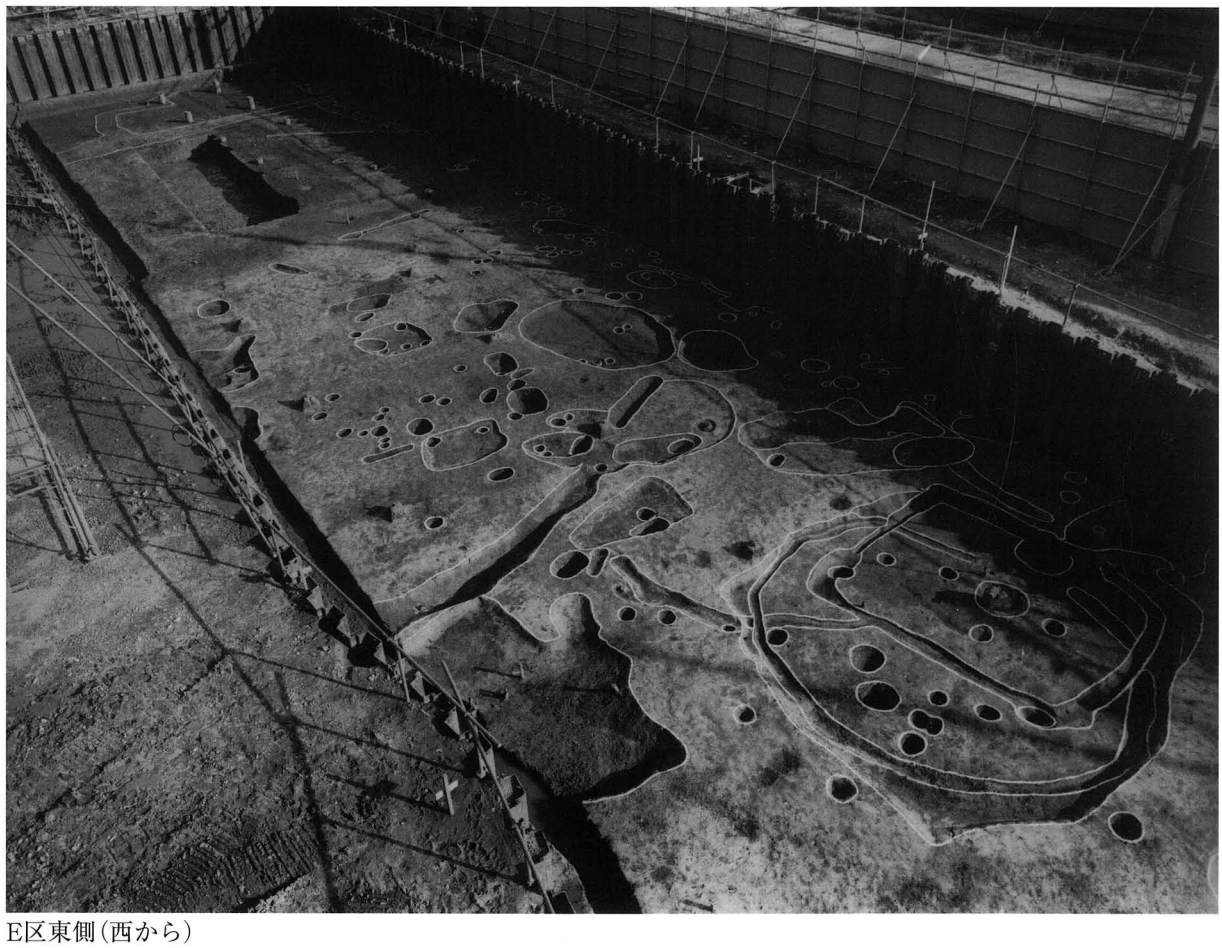
D区溝－3001断面

E区空中写真（北から）



E区全景（東から）

E区西側（東から）



E区東側（西から）

E区西端（北東から）

E区竪穴住居１・２・３（北から）

E区竪穴住居２・３（北から）

E区竪穴住居２・３・４

E区出土弥生土器

E区出土弥生土器

E区出土弥生土器

D区溝－3001出土須恵器

30

31

E区出土弥生土器

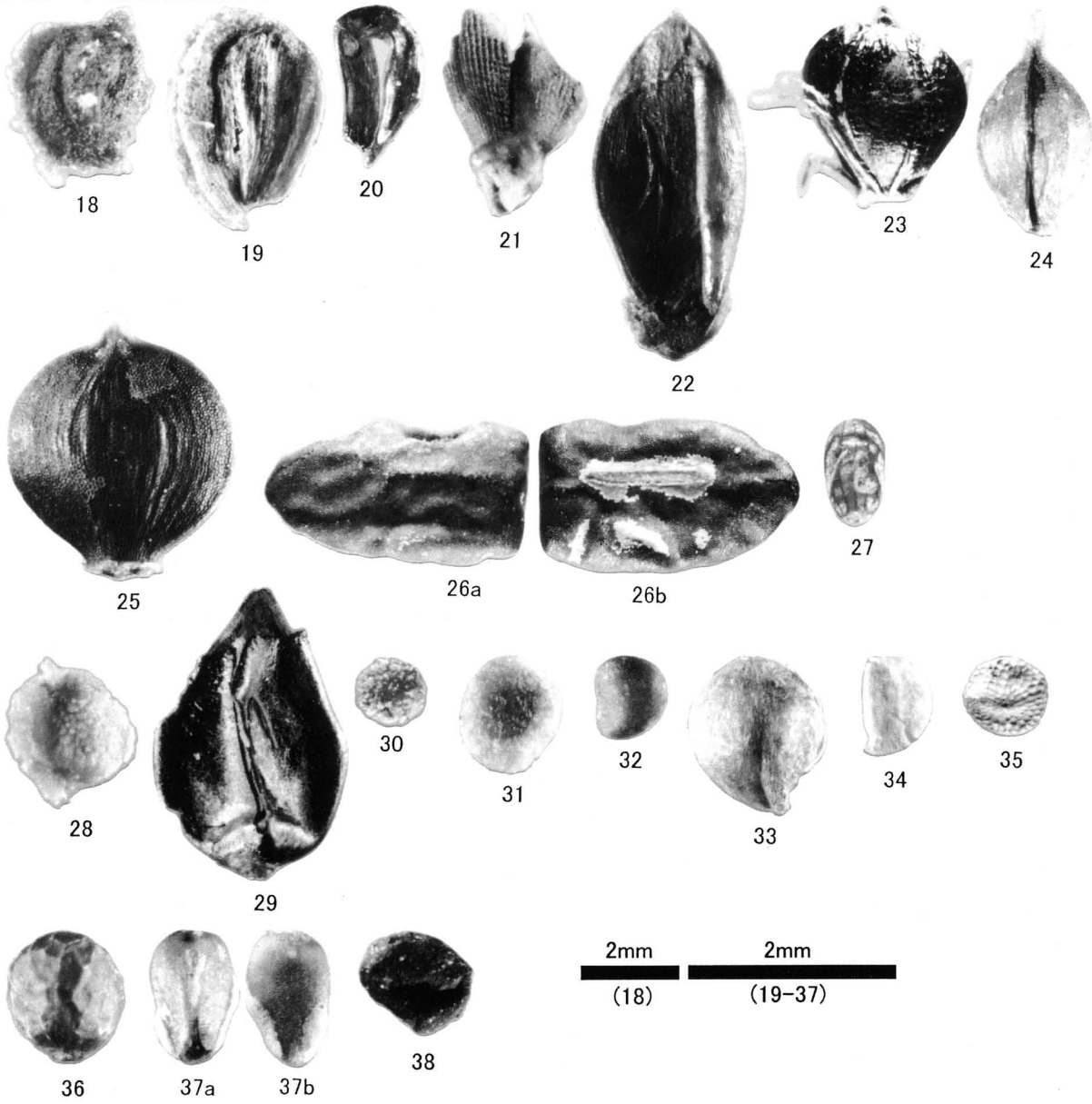
1

D区包含層出土土馬

図版1　大型植物遺体(1)

1．モミ属 葉(4地点;1)
2．マツ属複維管束亜属 葉(1地点;4)
3．マツ属複維管束亜属 球果(1地点;4)
4．マツ属複維管束亜属 球果(1地点;4)
5．マツ属 種子(1地点;4)
6．イヌシデ 果実(4地点;1)
7．コナラ属アカガシ亜属 幼果(4地点;1)
8．コナラ属アカガシ亜属 果実(4地点;1)
9．ヒサカキ属 種子(4地点;1)
10．サカキ 種子(4地点;1)
11．キイチゴ属 核(4地点;1)
12．ウルシ属 核(4地点;1)
13．ブドウ科 種子(1地点;7)
14．イイギリ 種子(1地点;7)
15．タラノキ 核(1地点;7)
16．ムラサキシキブ属 核(1地点;4)
17．ニワトコ 核(4地点;1)

図版2　大型植物遺体(2)



18．ヒルムシロ属 果実(1地点;4)
19．ヘラオモダカ 果実(1地点;5)
20．オモダカ科 種子(1地点;4)
21．イネ 穎(1地点;4)
22．イネ科 果実(1地点;4)
23．ホタルイ属 果実(1地点;4)
24．カヤツリグサ科 果実(1地点;4)
25．カヤツリグサ科 果実(1地点;4)
26．イボクサ 種子(1地点;4)
27．ミズアオイ属 種子(1地点;4)
28．カラムシ属 果実(1地点;5)
29．タデ属 果実(1地点;4)
30．トウゴクサバノオ 種子(4地点;1)
31．タガラシ 果実(1地点;4)
32．キジムシロ属－ヘビイチゴ属－オランダイチゴ属 核(2地点;2)
33．スミレ属 種子(4地点;1)
34．チドメグサ属 果実(1地点;4)
35．サクラソウ科 種子(2地点;2)
36．イヌコウジュ属 果実(1地点;4)
37．シロネ属 果実(1地点;5)
38．アカネ科 核(1地点;7)

大阪府埋蔵文化財調査報告2005－2

福　井　遺　跡　Ⅱ

発　行　大阪府教育委員会
〒540-8571
大阪市中央区大手前２丁目
TEL 06－6941－0351
発行日　2006年３月31日
印　刷　石川特殊特急製本株式会社